

京都帝国大学における中国人留学生 —明治大正期（1903-1926年）の入学者を中心に—

周一川

要旨

京都帝国大学における最初の留学生は1903年に入学した馬和（君武）であった。以降、1926年までに300人を超える（実数307人、延べ人数330人）中国人留学生が在籍した。

京都帝国大学には特徴的な留学生制度として「外国学生」制度があったが、その定義は時期によって変化した。明治期の「外国学生」は外国人学生の意味で、単純に国籍によって判断されていた。しかし、大正期後半からは「外国学生」とは別に留学生本科生が存在する状況となって、国籍だけでは線引きができなくなり、定義が曖昧となった。昭和期に入ると、「外国学生」の定義が旧制高等学校以外の教育機関（中国の教育機関を含む）出身の留学生と明確になった。

1908-1922年に実施された「五校特約」協定により「五校特約生」が誕生し、彼らの帝大進学は15年以上続き、中国人帝大留学の第一次ブーム（第二次は1930年代半ば）を引き起こした。

中国人帝大生は数としてはそれほど多くなかったが、全体的にみると、彼らは帰国後中国社会の各分野の中核を担う人材となり、中国の近代化の発展に大いに貢献した。

キーワード：京都帝国大学；中国人留学生；留日学生；「五校特約」；「外国学生」

はじめに

帝国大学の留学生についての調査研究は、大学史⁽¹⁾の編纂から始まった。その後、東京帝国大学、九州帝国大学、東北帝国大学、北海道帝国大学の留学生に関する論文や研究報告⁽²⁾など、個別の大学に焦点を当てたものを中心に帝国大学の留学生研究成果が徐々に増えていった。

しかし、京都帝国大学の中国人留学生を総合的に扱った研究はいまだに見当たらない。そこで筆者は、2023年から京都帝国大学の中国人留学生の名簿整理に本格的に着手した。名簿の基礎データを根拠に、まず、昭和前期を対象に京都帝国大学の中国人留学生の人数、専攻、身分類別、出身校などを分析し、その全体像を浮き彫りにするとともにいくつかの点を明らかにした⁽³⁾。

本稿はその研究の続編であり、前史にあたる明治大正期を対象とするものである。文末に資料として添付する「京都帝国大学中国人留学生名簿——明治33—大正15（1903-1926年）の入学者——」（以下「名簿」）は、『京都帝国大学一覧』（以下『一覧』）⁽⁴⁾の学生及生徒名簿と卒業生名簿から抽出した留学生のデータをベースにして作成したものである。なお、『一覧』には掲載されていなかった留学生の出身省、出身校、学費別などの情報は、他の資料⁽⁵⁾から補足した。本稿の各表はすべて「名簿」から作成した。グラフについては、付録「明治大正期（1903-1926年）京都帝国大学各分科大学・学部の中国人留学生統計表」から作成した。同表は各分科大学・学部の年度別、身分類別の人数を明らかにしており、本文では詳しく論じていない学部別の留学生の身分構成の特徴及びその変化もわかる統計となっている。

本稿が目指しているのは、「名簿」のデータに基づいて、明治大正期の京都帝国大学中国人留学生の全体像を描き出し、その特徴を解明することである。

なお、本稿では基本的に漢数字をアラビア数字に、元号を西暦とし、旧字は新字とした。

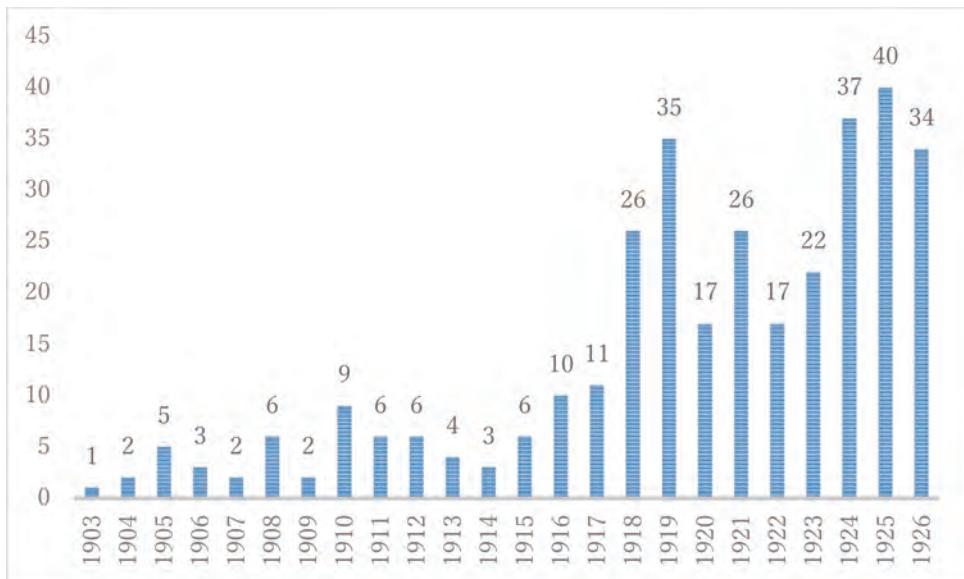
一．人数の変動から見る留学生の実態

中国人的帝国大学留学は、1899年から始まり⁽⁶⁾、初期の帝大進学希望の留学生の進学先は東京帝国大学（以下東京帝大）に集中していた。京都帝国大学（以下京都帝大）最初の中国人留学生は、1903年に「外国学生」として理工科大学に入学した馬和（君武）であった⁽⁷⁾。その後、毎年数人の中国人留学生の入学が続き、1910年代後半からその人数は急増した。

1. 中国人留学生人数の推移

グラフ1は、1903-1926年に京都帝大に入学した中国人留学生の年度別の人数であり、合計330人（延べ人数）であった。二つの分科大学・学部に入学（分科大学の分離と学部の新設による転部、あるいは他の理由による転部及び卒業後の他学部への再入学など）した者は23人（表1を参照）いたので、実数は307人である。

グラフ1 京都帝国大学中国人留学生の各年度入学者数（1903-1926年、延べ人数） 単位：人



2. 最初の外国人留学生——馬和（君武）

馬和（君武）（1881-1940年）は京都帝大最初の外国人留学生である。彼は1903年に同大の分科大学の一つである理工科大学に入学し、1905年まで3年間在籍した。

馬君武は廣西桂林恭城に生まれ、青少年時期にいくつかの学堂で中国古典の他に英語、数学、フランス語を学んだ。1901年冬、彼は私費留学で来日し、在日期間に民主、自由、女権、共和、近代科学などに関する翻訳や論説などを数多く発表した。京都帝大の在学中に休み期間を利用して積極的に革命運動にも参加した⁽⁸⁾。1905年夏には同盟会が成立する準備段階から参加し、同盟会章程起草にも関わった。同盟会の執行部と広西省のリーダーに指名されたが、学業のために受任しなかった⁽⁹⁾ようである。

1906年に帰国した馬君武は上海で中国公学の創設に参画し、総教習兼理化教授を担任したが、その後ドイツ留学に旅立った。

馬君武のドイツ留学に関しては、様々な説があったが、陳昌春の調査と分析によると、馬の第一回のドイツ留学は1907年にベルリン工芸大学で冶金を学び、1911年に卒業したとされる。第二回の留学は、1913-1915年にベルリン大学で学び、工学博士の学位を取得したのである⁽¹⁰⁾。

馬君武は1911年にドイツから帰国すると、武漢に行き、南京臨時中央政府成立のために準備活動を行って、『中華民国臨時約法』の起草にも参加した。臨時政府成立後は、実業部次長を務めた。彼はそのほかに、中華民国非常大總統府秘書長、北京政府の司法部部長など要職も歴任したが、1920年代半ばからは教育に力をそそぎ、北京工業大学校長、上海大夏大学校長、広西大学校長などを歴任し、広西大学の創立にも参与した⁽¹¹⁾。「一代宗師」と呼ばれる馬君武が1900-1919年頃に翻訳した文章、執筆した論説及び詩集などは、『馬君武集』⁽¹²⁾に収録されている。

『一覧』の記録から見ると、馬君武は京都帝大を卒業していなかったが、理工科大学で数年間学んだことで、その後の学業の基礎ができたのだろう。

3. 京師大学堂からの留学生

京都帝大は1903年から中国人留学生を受け入れ、1911年までに36人の中国人留学生が在籍した。その中で、10人（1905年5人、1908年5人）の京師大学堂（北京大学の前身）出身の留学生は第一高等学校を経て京都帝大に進学した。

1904年に京師大学堂は31人の官費留学生を日本に派遣し、その教育を第一高等学校（以下一高）に任せた⁽¹³⁾。京師大学堂から派遣された31人の官費生以外に5人の私費留学生も一緒に来日し、一高に入学したことは「狩野亨吉文書」により判明している。

写真1 京師大学堂派遣留学生名簿（一部）

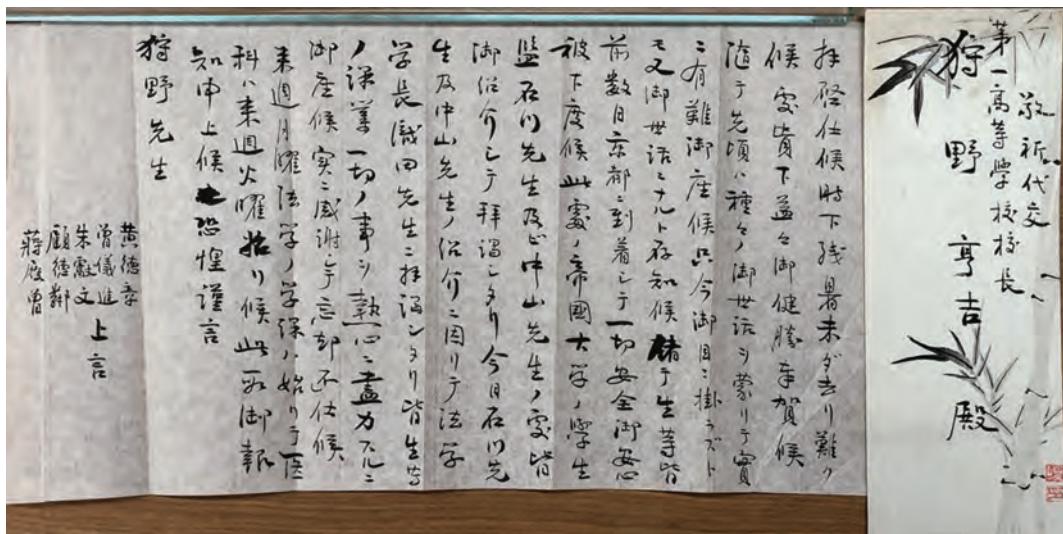
學歷	年歲	族譜
杜福垣	廿二	
余肇昌	廿三	
景定成	廿四	
范熙至	廿五	
席聘臣	廿六	
黃鑾鶴	廿七	
陳於禮	廿八	
王相齡	廿九	
葉克教	三十	
蔣復曾	三一	
陳繼鵠	三二	
吳宗拭	三三	
周宣	三四	
顧樸鄰	三五	
朱炳文	三六	
成寫	三七	
王曾憲	三八	
朱獻文	三九	
何培琛	四十	
史錦祥	四一	
馮祖禹	四二	
劉完熟	四三	
劉成志	四四	
朱深	四五	
王運震	四六	
同	四七	
同	四八	
同	四九	
同	五十	
同	五十一	
中書	五十二	
舉人	五十三	
廉生	五十四	
廉生	五十五	
廣東瓊山	五十六	
廉生	五十七	
附生	五十八	
文童	五十九	
附生	六十	
江蘇宜興	六一	
江蘇太倉	六二	
增生	六三	
浙海甯	六四	
藍生	六五	
湘長沙	六六	
江蘇太倉	六七	
舉人	六八	
南陽令	六九	
增生	七十	
江蘇宜興	七一	
江蘇太倉	七二	
江蘇太倉	七三	
江蘇宜興	七四	
江蘇太倉	七五	
江蘇宜興	七六	
江蘇太倉	七七	
江蘇宜興	七八	
江蘇宜興	七九	
江蘇宜興	八〇	
江蘇宜興	八一	
江蘇宜興	八二	
江蘇宜興	八三	
江蘇宜興	八四	
江蘇宜興	八五	
江蘇宜興	八六	
江蘇宜興	八七	
江蘇宜興	八八	
江蘇宜興	八九	
江蘇宜興	九〇	
江蘇宜興	九一	
江蘇宜興	九二	
江蘇宜興	九三	
江蘇宜興	九四	
江蘇宜興	九五	
江蘇宜興	九六	

出典：「狩野亨吉文書 清国留学生関係文書 留学生の名簿」 東京大学駒場図書館所蔵。

写真1は、1904年1月に一高に着いた京師大学堂の留学生名簿である。32人の中に私費留学生は5人（○印）であった。遅れてきた官費生として陳治安、曾儀進、蘇振潼、唐演⁽¹⁴⁾の4人がおり、合計で36人⁽¹⁵⁾である。

「狩野亭吉文書」には、京師大学堂から京都帝大に進学した者に関する貴重な資料が含まれている。それは、京都帝大に進学した5人の留学生から狩野亭吉校長へ宛てられたお礼の手紙である。

写真2 「清国留学生書簡（3）」



出典：「狩野亨吉文書 第一七函（チ-9）中国・朝鮮関係（留学生 黃・曾・朱・顧・蔣）」東京大学駒場図書館所蔵。「清国留学生書簡（3）」東アジア藝文書院ウェブサイトのプロジェクトページ「一高中国人留学生と101号館の歴史展（2）」に掲載されている。

<https://www.eaa.c.u-tokyo.ac.jp/projects/first-high-school-materialsarchive/exhibition-101-history-2/>, 閲覧日：2024年9月26日。

この36人の留学生は、一年間一高で勉強した後、「確認不可の一名を除く全員が進級し、一年は二年に、延長学級は一年に編入し、速成学級は東京帝国大学または京都帝国大学の選科に進んでいった」⁽¹⁶⁾。

京師大学堂の36人の名簿を資料「名簿」と照合してみると、1905年京都帝大に入学した5人は、法科大学に4人、医学大学に1人で、選科生ではなく、全員「外国学生」の身分であった。

以上の5人以外にも5人の京師大学堂出身者がその後京都帝大に「外国学生」として進学したことが「名簿」により確認できる。彼らは1905年に入学した5人より数年遅れた1908年に進学した。5人中4人（範熙壬、席聘臣、馮祖荀、蘇振潼）は、一高を卒業してから京都帝大に進学し、残りの1人の屠振鵬は卒業していなかったようである⁽¹⁷⁾。「名簿」からわかるように、京師大学堂出身の10人の留学生中、1905年に入学した5人のうち4人は法科大学に集中しており、残りの1人は医科大学であった。1908年に入学した5人は、法科大学3人（範熙壬、席聘臣、屠振鵬）、理工科大学に2人（馮祖荀、蘇振潼）であった。

馮祖荀は、帰国後北京大学の数学門（その後の数学系）の創建にかかり、長い間数学系（学部）の主任をして、北京師範大学などの数学系主任も兼務した。北京大学新聞ネットワークによると、馮祖荀は「中国現代数学的開山鼻祖」（中国現代数学の創始者）と評価されている⁽¹⁸⁾。

蔣履曾は、1910年3月に卒業し、京都帝大の最初の中国人留学生卒業生であった⁽¹⁹⁾。彼は、在学中に留学政策などに关心を持ち、長文の意見書を書いたが、その内容は「京都医学大学生蔣履曾來書 附監督処批答」⁽²⁰⁾というタイトルで『官報』に掲載された。蔣履曾は1907年に京師大学堂衛生官となり、卒業後の1910年9月に医学挙人を授与された⁽²¹⁾。民国期に南京第一医院長⁽²²⁾となり、中国近代医学界の重鎮となった。

4. 明治期における第三高等学校からの進学者

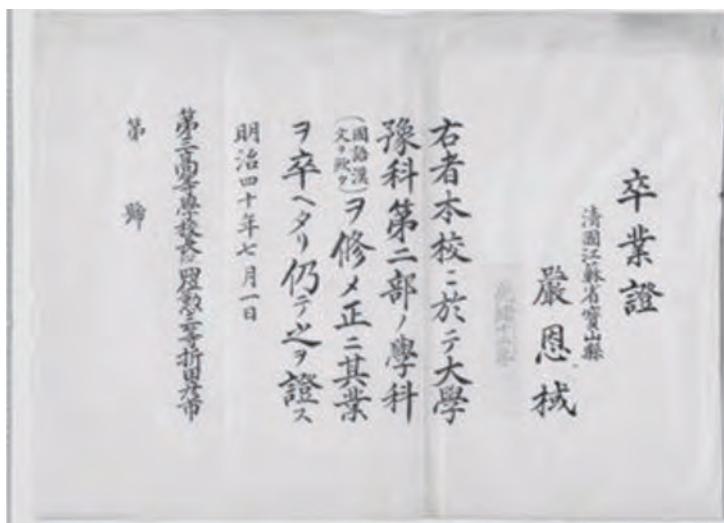
1897年に京都帝大が創立された際、第三高等学校（以下三高）は京都帝大に校舎などを譲り、隣接

地に校舎を新設した。現在の京都大学構内の正門は1897年に三高の正門として作られていたものである。明治期の三高の留学生卒業生（7名）の中に京都帝大に進学した者は2人⁽²³⁾であった。

①三高初の留学生卒業者——嚴恩械

1904年9月に三高に入学した嚴恩械は、1907年7月に卒業し、三高最初の留学生卒業生となった。同時に京都帝大の理工科大学に進学して採鉱冶金を学び、1910年7月に卒業した⁽²⁴⁾。嚴恩械は優秀な留学生であり、帰国後学部により北京で挙行された「登用試験」の「廷試」で96点の最高得点を取った人物である。帰国後の彼は中国のいくつかの鋼鉄工場の建設に携わり、近代中国の鋼鉄冶金業における先駆者の一人といえ、指導的な地位を獲得していった⁽²⁵⁾。

写真3 三高留学生の「卒業証」例



出典：「三高-3639 卒業証書授与式書類 明治四十年」京都大学文書館所蔵。

②京都帝大初の留学生本科生——周作民

周作民（旧名維新）は、1906年9月に三高に入学し、1910年9月に卒業した⁽²⁶⁾。『一覧』の記録によると、周作民は1910年に本科生として京都帝大の法科大学の法律学科に在籍していたが、翌年政治学科に転科し、1918年まで在籍した。『一覧』の記録以外には周作民の京都帝大時期に関する資料はまだ見つかっていない。

周作民（1884-1955）は、中華民国及び中華人民共和国の銀行家、実業家、政治家であり、金融界の名士である。周作民の経歴では、少なくとも中華民国成立後の1912年から中国で活躍しており、『一覧』の記録では1910-1918年に京都帝大に在籍していたことになっているが、実際は京都帝大にいなかったことは明白である。『中国国民党百年人物全書』によると、周作民は1912年に南京臨時政府財政部庫藏司科長を務め、翌年北京政府財政部庫藏司司長に昇進している。1915年には交通銀行に入り、1917年に金城銀行を創立して、総經理を担任した。1918年以後は、安福国会参議院議員、京師商会会長など歴任している⁽²⁷⁾。

資料の「名簿」を見ると、周作民より1年遅れて法科大学に入学した4人の選科生も8年間（1911-1919年）在籍していた記録になっているが、おそらく当時の法科大学では実際に在校しなくても8年間学籍が保留されていたのであろう。

5. 「五校特約生」の帝大進学

グラフ1からわかるように、大正期半ばから京都帝大の中国人留学生の人数は顕著に増加した。それは、1908年からの「五校特約」協定の実施と深く関わっていた。

「五校特約」とは、1908-1922年の15年間に、日本の5校（第一高等学校、東京高等師範学校、東京高等工業学校、山口高等商業学校、千葉医学専門学校）が、毎年合計165人の官費留学生を受け入れるという日中両国との間で決められた留学生教育協定である。「五校特約」に関する先行研究は、二見剛史、呂順長、嚴平、韓立冬らの研究⁽²⁸⁾があり、「五校特約」が締結された背景、過程、内容、結果などについて明らかにされている。第一高等学校については韓立冬、第三高等学校に関しては嚴平の論文が詳しい。近年、東京大学東アジア藝術学院ウェブサイトのプロジェクトページ「一高中国留学生与101号館歴史展」⁽²⁹⁾によって、一高の中国人留学生に関する貴重な資料が展示され、いくつかの新たな史実が浮き彫りになった。

「五校」の中で一高は、中心的な存在であった。当時の留学生たちは、一高の特別予科に合格できれば、帝国大学へ進学する門戸が開かれ、エリートコースのスタートラインに立つこととなった。1908年に設立された一高の特別予科は、年間50人程度の中国人留学生を受け入れ、1年間の予備教育を行った。予備教育を経た留学生は旧制高等学校（一高～八高）に配分され、日本人と同じように3年間の高等学校教育を受けてから、帝国大学へ進学した。先行研究によると、一高の特別予科に合格しても帝大へ進学するのはかなり厳しい道であった。1908年に特別予科に合格した留学生60人のうち、1年後に修了したのが44人であり⁽³⁰⁾、16人が脱落した。特別予科を修了後、一高～八高に割り振られた留学生も卒業できない者が少なくなかった。嚴平の調査研究によると、三高の留学生が卒業までかかった年数は「2年半から6年間までと個人差が見られるが、卒業者は全部で64名に上り、卒業率は、全体の79.1%と高まっている」⁽³¹⁾とされている。つまり、卒業できなかった者は約20%いた。

最初の「五校特約生」は、1908年から4年間（特設予科1年・高等教育3年）の教育を受け、1912年頃に帝国大学に進学する時期を迎えた。グラフ1の京都帝大の各年度入学者人数を見ると、入学者の増加は1916年以後のことである。それは1916年以前の「五校特約生」の進学先が、東京帝大に集中していたからであろう。

資料「名簿」からわかるように、当該時期に京都帝大に在学していた留学生本科生の出身校は、理科大学（1919年から理学部）を除いては、ほとんど旧制高等学校であった。「五校特約生」が帝国大学に進学したことは、大正期の帝国大学における中国人留学生增加の主な要因である。

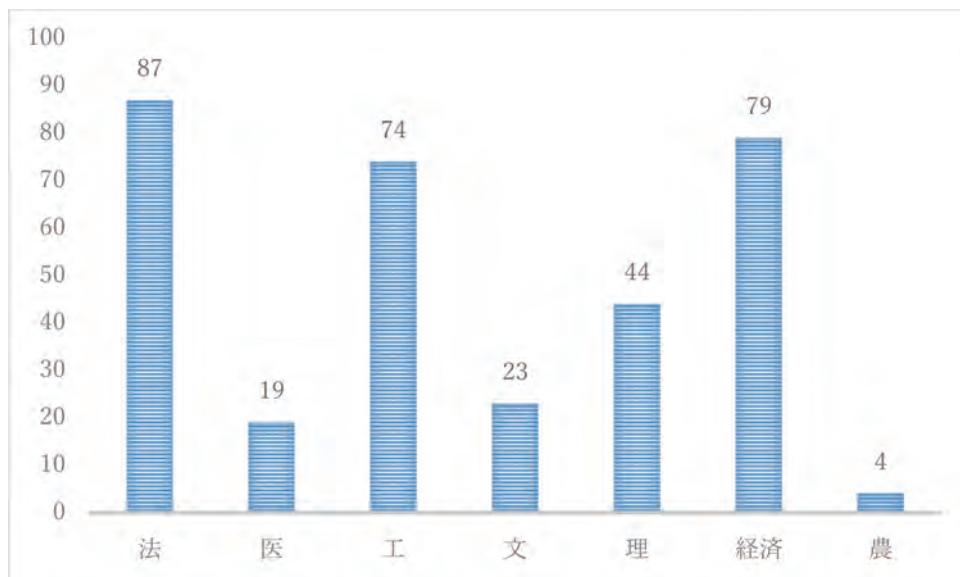
昭和初期に入ってからの数年も京都帝大の中国人留学生総数は100人を超えていた。1922年に「五校特約」が終了した数年後から、帝国大学の入学資格を持つ留学生が急速に減り、30年代初期に京都帝大留学生の入学者数も著しく減少した⁽³²⁾。

二. 専攻の分布及び二つ以上の分科大学・学部に在籍した者

1. 専攻の分布——河上肇教授の影響

資料の「名簿」によると、1903-1926年の間に京都帝大の7学部（法、医、工、文、理、経、農）に入学した延べ人数は330人であった。その内の23人は、転学部や再入学などによって、二つの分科大学・学部に在籍していたので、京都帝大中国人留学生の実数は307人である。

グラフ 2 各分科大学・学部の中国人留学生人数（1903–1926年、延べ人数）単位：人



グラフ 2 からわかるように、法科大学・法学部の留学生が 87 人で一番多く、次は経済学部の 79 人、理工科大学・工科大学・工学部は 74 人であった。文系と理系を分けてみると、文系の法、文分科大学・学部と経済学部が 189 人、理系の工、理、医科大学・学部と農学部が 141 人であり、文系の学生が多かった。

経済学部は 1919 年に法科大学から独立した新学部であったが、それにもかかわらず多くの留学生が経済学部に集まっていた。この現象は当時の京都帝大の法科大学、のち経済学部教授であった河上肇の存在と強く関わっていると思われる。

河上肇（1879–1946）は日本の経済学者で、京都帝大で教鞭をとっていた時期（1915–1928 年）にマルクス経済学の研究を行っていた。1919 年の五四運動の時期から、中国では河上肇の著作などが数多く翻訳されていた。「近現代中国の学術、思想に与えた影響を考察する際に日本の社会科学者の中でもっとも重きをおかれるべき人物は、河上肇をおいては他にはいない」⁽³³⁾と膨大な関連データを分析した三田剛史は主張している。

河上肇が経済学部で担当した科目は、経済原論、経済学史などであり、数多くの経済学部の学生だけではなく、他学部のマルクス理論などに関心を持っている留学生も聴講したのだろう。資料「名簿」からわかるように、のちに中国のマルクス理論経済学者となった王守椿（学文）、漆樹芬は 1921 年に経済学部に入学した学生である。

河上肇を指導教官として大学院への入学を許可された留学生は、李希賢、張源祥、漆樹芬、王守椿の 4 人⁽³⁴⁾のようである。張源祥⁽³⁵⁾は 1923 年 9 月末まで東京帝大に在籍していた⁽³⁶⁾が、1924 年 3 月に京都帝大の経済学部の学生として卒業している。この事実から、張は 1923 年 10 月以後に東京帝大から京都帝大に転学したことがわかる。その転学の理由について文献資料はまだ見つかっていないが、1923 年 9 月の関東大震災の影響があったのではないかと考えられる。それだけではなく、彼には河上肇のそばで勉強したいという考えもあったのではないか。

2. 転部生（他分科大学及び他学部へ）と再入学者

「京都帝国大学通則」には、「……入学希望者ヲ収容シ尚欠員アル場合ニ限り記載ノ順位ニ依リ入学ス

ルコトヲ得」とし、その対象として「一学部ヨリ他学部ニ転学ヲ望ム者」が含まれていた⁽³⁷⁾。

1903-1926 年の入学者のうち 23 人は転部などにより、二つの分科大学あるいは学部に在籍していた。

表 1 の転部生は、京都帝大の分科大学の分離により他の分科大学や学部へ転入した者、その他の理由で他学部へ転入した者を指す；再入学者は、卒業後に他学部に再入学した者、また卒業せずにその後再入学した者も含まれている。

表 1 京都帝国大学中国人留学生の転部生と再入学者リスト

	氏名	分科大学・学部	在学時期等	転部・再入学先の分科大学・学部	在学時期等	備考
1	杜國庠	法科大(27)	1916-1918	→ 経(1)	1919 卒	分科大学の分離
2	鄧紹先	法科大(28)	1916-1918	→ 経(2)	1919 卒	同上
3	何品佳	法科大(31)	1917-1918	→ 経(3)	1919-1920 卒	同上
4	何崧齡	法科大(34)	1917-1918	→ 経(4)	1919-1920 卒	同上
5	李希賢	法科大(36)	1918	→ 経(5)	1919-1920 卒	同上
6	黃興(典)元	法科大(37)	1918	→ 経(6)	1919-1920 卒	同上
7	朱公準	法科大(38)	1918	→ 経(7)	1919-1920 卒	同上
8	戎春田	法科大(39)	1918	→ 経(8)	1919-1921	同上
9	張 鑄(階)	法科大(42)	1918	→ 経(9)	1919-1920. 1	同上, 1920 年度不明
10	李國權	法科大(43)	1918	→ 経(10)	1919-1920. 1	同上
11	于樹德	法科大(44)	1918	→ 経(11)	1919-1920. 1	同上
12	安體誠	法科大(45)	1918	→ 経(12)	1919-1920. 1	同上
13	胡濬濟	理工科大(5)	1908	理(10)	1919	11 年後の再入学
14	蘇振潼	理工科大(9)	1910- <u>1913</u>	→ 理科大(1)	1914-1915	分科大学の分離, 1913 年度不明
15	張貽惠	理工科大(10)	1910- <u>1913</u>	→ 理科大(2)	1914-1915 卒	同上
16	郭鴻鑾	理工科大(11)	1910- <u>1913</u>	→ 理科大(3)	1914 卒	同上
17	江 鉄(鐵)	工(37)	1919-1922 卒	→ 経(43)	1922	
18	張定釗	工(50)	1921	→ 理(16)	1922-1923 卒	
19	傅書邁	工(51)	1921-1924 卒	→ 文(18)	1925-1930 卒	
20	金華錦	理(21)	1923	→ 工(62)	1924-1928 卒	
21	曹鼓晨	理(31)	1925-1928	農(4)	1926(二重学籍)	1929-1932 年に経済学部に在籍
22	竺華(萃)雲	経(35)	1921-1924 卒	→ 理(28)	1924	
23	金正驥	経(17)	1919-1924 卒	→ 法(75)	1925-1929	

注：() の数字は資料「名簿」の付番である。下線付き「卒」は、『一覧』には卒業記録がなく、『人名調』の卒業名簿にあるものである；二重下線は、筆者が推定したものである。

表 1 からわかるように、15 人の転部の理由は分科大学の分離によるものである。法科大学から経済学部に 12 人、理工科大学から理科大学に 3 人であった。他には一つの学部を卒業したのち、他学部に

再入学した者も 4 人いた。その 4 人の中の 1 人傅書邁は、工学部も文学部も卒業しており、さらに文学部の大学院に進学した。

1908 年に理工科大学に在籍していた胡濬濟は、11 年後の 1919 年に理工大学に再入学したと考えられる。『中国留日学生監督処文献』の「民国 8 年各帝大在学生冊」(1919 年 10・11 月)⁽³⁸⁾に氏名を確認できるが、同年の『一覧』には見当たらない。1919 年『一覧』の「学生及生徒姓名」の調査時期は 6 月初なので、彼はおそらく 6 月以後に入学したのであろう。

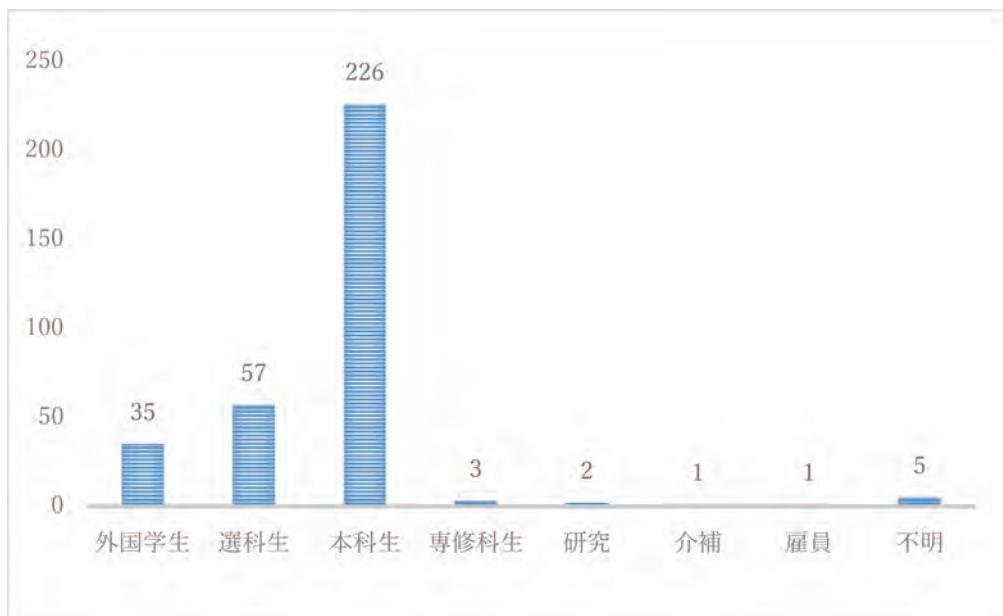
曹鼓晨は 1925-1928 年に理学部に在籍していたが、1926 年に農学部にも在籍しており、二重学籍の時期があったと考えられる。彼は 1929 年に経済学部に転部し、1932 年まで在籍した。

三. 身分類別と身分転換

1. 類別

グラフ 3 は、京都帝大留学生入学時の身分別人數（1903-1926 年）である。入学年度不明の場合は、在学年度で数えた。

グラフ 3 京都帝国大学中国人留学生の身分別人數（入学時） 単位：人



明治大正期京都帝大留学生の中で一番多い身分は本科生であり、226 人にものぼった。前述のように本科生の急増は、「五校特約」協定がもたらしたことであった。「五校特約生」の帝国大学進学が、第一次中国人帝大留学のブームを引き起こしたのである。

選科生は 57 人であり、人数の多さは本科生の次ぐ数であるが、本科生の約 4 分の 1 に過ぎなかつた。選科生は入学条件がそれほど厳しくなかった。厳平の調査によると、帝大の選科入学が決まつたため三高を卒業しなかった留学生（傅銳、梅詒經、毛頌芬）がいた⁽³⁹⁾。

「名簿」の選科生の出身校は不明の部分が多いが、ほとんどは旧制高等学校以外の教育機関の出身者あるいは旧制高等学校の中退者であろう。

「外国学生」35 人中 20 人は明治期に入学した者であり、彼らはそれぞれ当時の四つの分科大学（法、医、理工、文）に在籍していた。つまり、当時のすべての分科大学は「外国学生」を受け入れて

いたのである。1920年前後に「外国学生」制度が復活したが、それは経済学部だけを対象とし、他の学部は「外国学生」を受け入れなかつた。昭和期に入ってから、徐々に「外国学生」を受け入れる学部（経済、法、文、工、農）が増え、人数も131人⁽⁴⁰⁾にのぼつた。

2. 身分転換

「京都帝国大学通則」により、卒業試験に合格して卒業証書を授与されるのは本科生と「外国学生」及び委託生とされ、選科生は卒業証書ではなく修業証書が授与された。入学後に学生身分が変更された留学生が29人おり、その多くは、選科生から本科生あるいは「外国学生」となつた。つまり、卒業できる身分への変更であった。

しかし、1910年に在籍の5人（表2の1~3番、8と9番）の「外国学生」が一齊に「選科生」の身分に変更させられたこともあり、その後の10年間は「外国学生」の姿が消えた。その変更の理由に関しては、細則などの規程上によるものだと考えられるが、文献資料はまだ見つかっていない。

自大正7年至大正8年『一覧』と自大正8年至大正9年『一覧』の「学生及生徒姓名」の調査時期は、それぞれ1919年6月と1920年1月となっている。1919年6月と1920年1月は別年度⁽⁴¹⁾なのだが、7か月しか間がないため、表2には月まで転記してある。

表2 京都帝国大学の入学後に身分変更された留学生リスト

	氏名	分科大学・学部	入学時	期間	変更後	期間	備考
1	屠振鵬	法科大(9)	外	1908-1909	選	1910	
2	席聘臣	法科大(10)	外	1908-1909	選	1910	
3	范熙壬	法科大(11)	外	1908-1909	選	1910	
4	梅詒経	法科大(18)	選	1912-1913	本	1914-1915	卒
5	張承(乘)運	法科大(19)	選	1912-1914	本	<u>1915</u>	卒
6	毛頌芬	法科大(20)	選	1912-1914	本	<u>1915</u>	卒
7	劉鴻漸	法科大(21)	選	1912-1914	本	1915-1916	卒
8	何崧齡	法科大(34)→経(4)	選	1917-1919.6	外	1920.1	<u>1920卒</u>
9	馮祖荀	理工科大(6)	外	1908-1909	選	1910-1911	
10	范 銳	理工科大(7)	外	1909	選	1910-1912	<u>1912卒</u>
11	傅 銳	理工科大(12)	選	1910-1913	本	1914-1915	卒
12	郭鴻鑾	理工科大(11)→理科大(3)	選	1910-1913	本	1914	卒
13	晋集仁	理学部	選	1919-1922	本	<u>1923</u>	卒
14	江聖達	工(49)	本	1921-1922	選	1923-1925	<u>1925卒</u>
15	張 鐘(階)	経(9)	選	1919.6	外	1920.1	
16	李國權	経(10)	選	1919.6	外	1920.1	
17	于(干)樹德	経(11)	選	1919.6	外	1920.1	
18	安體誠(德)	経(12)	選	1919.6	外	1920.1	
19	孫 極	経(18)	選	1919-1920.1	本	1921	卒
20	龔樹森(林)	経(38)	選	1921	本	1922-1923	卒
21	陳文瀾	経(46)	選	1922-1925	本	1926	卒

22	董道寧	経(72)	外	1925-1926	本	1927-1928	卒
23	鄧 霽	経(73)	外	1926	本	1927-1929	
24	杜肅(蕭)	経(74)	外	1926	本	1927-1929	卒
25	劉懋鏞	経(75)	外	1926	本	1927-1929	
26	龍守成	経(76)	外	1926	本	1927-1928	卒
27	高翔鶴(鶴)	経(77)	外	1926	本	1927-1928	卒
28	龔 一	経(78)	外	1926	本	1927-1928	卒
29	章 嚴	経(79)	外	1926	本	1927-1928	

注：（ ）の数字は資料「名簿」の付番である；下線付きは『人名調』によるものであり、二重下線付きは、筆者が推定したものである。

表2の梅詒経（付番4）と劉鴻漸（同6）は、それぞれ1914年と1915年に選科生から本科生になり、1915年7月と1916年7月に卒業した。しかし、梅詒経と同期に入学し、同時に卒業した張承（乘）運、毛頌芬は、1914年10月末の時点で選科生のまま⁽⁴²⁾であった。選科生の規定によると、選科生は学業を修了すると修業証書が授与されるので、卒業の扱いではなく、『一覧』の卒業生名簿には通常氏名が載らない。しかし、張と毛2人の名前は、『一覧』の「卒業生姓名」にあり、梅詒経とともに「1915年7月卒業」⁽⁴³⁾の枠に記載されている。1916年7月に卒業した劉鴻漸は1915年に本科生になった⁽⁴⁴⁾ことから、張承（乗）運も毛頌芬も1915年頃に本科生になって卒業したのではないかと推測される。表2の晋集仁（付番13、理学部）も1923年頃に本科生になったのだろう。

前述した京都帝大選科入学により三高を卒業しなかった3人（傅銳、梅詒経、毛頌芬）は、表2からわかるように、入学数年後、全員本科生に身分を変更し、卒業している。表2の何崧齡（付番8）も三高に1909年9月—1914年3月に在籍していたが、「無届欠席」により除籍された⁽⁴⁵⁾ようである。その数年後の1917年に彼は京都帝大法科大学選科に入学したことが『一覧』に記録されており、1920年に「外国学生」に身分を変更している。

3. 大学院への進学者

京都帝大中国人留学生の中で本科卒業後大学院へ進学した者は明治期には1人もおらず、大正期に集中していた。各学部の人数は次の通りである。法11人；医2人；工5人；文3人；理5人；経11人；農1人、合計38人であった。

四. 「外国学生」制度とその実態

京都帝大が成立した当時から留学生を受け入れる方針が定められていた。その後、次のように留学生に関する規定は数回改定されていたが、その変更は在学留学生の状況に合わせて行われたようである。

1. 留学生に関する規定と「外国学生」

1887年9月3日付の京都帝大「分科大学通則」「第2章 入学」では、留学生について次のように定めている。

「第十三条 外国人ニシテ入学セントスル者アルトキハ其志望学科ニ従ヒ特別ノ試問ヲ行ヒ之ヲ許可スルコトアルヘシ

本条ノ場合ニ在テハ第十二条ニ定ムル保証書ヲ要セス本人ノ属スル本邦駐在ノ公使又ハ領事ノ証明書

ヲ差出スヘキモノトス」⁽⁴⁶⁾

1903年、理工科大学に京都帝大の初めての留学生であった馬和（君武）が入学し、1904年に「清国」とインドから複数の留学生⁽⁴⁷⁾が入ってきた。同年の1904年9月1日付「京都帝国大学通則」第2章分科大学に新たに「第3節 外国学生」が追加された。「分科大学通則」留学生の規定も改定され、「特別の試問」などの条項がなくなり、文部省令⁽⁴⁸⁾を基準にして、学生又は選科生に関する規定を準用すること⁽⁴⁹⁾にした。「第3節 外国学生」が「京都帝国大学通則」に追加されたのは、最初の留学生馬君武と1904年の「清国」とインドからの留学生たちの入学によるものであろう。

1909年10月20日付の「通則一部改正〔外国学生規定中改正〕」では、次のように「外国学生」の卒業が認められた。

「第三十六条ノ二 外国学生ニシテ当該分科大学所定ノ試問ニ合格シタル者ニハ本人ノ願ニヨリ学力ヲ検定シ大学予科卒業ト同等以上ト認メタルトキハ卒業証書ヲ授与スルコトヲ得」⁽⁵⁰⁾

1909年10月の「外国学生」規定改正の時期から見ると、すでにインドの「外国学生」2人⁽⁵¹⁾が卒業しており、翌年の1910年に3人の「清国」留学生（蔣履曾 1910.3卒、張景先 1910.7卒、嚴恩械 1910.7卒）とインド留学生2人⁽⁵²⁾が卒業予定であった。在籍している「外国学生」の修業状況が規定の改正を促し、「外国学生」の卒業を規定上認めたのである。

1911年1月20日の「京都帝国大学通則」は、「外国学生」に関しては次のように規定した。「外国学生ニシテ学部所定ノ試験ニ合格シタル者ニハ本人ノ志望ニ依リ学力ヲ検定シ高等学校高等科卒業同等以上ト認メタルトキハ卒業証書又ハ学士試験合格証書ヲ授与ス」⁽⁵³⁾。

「外国学生」規定は、同制度の開始も規程上で正式に卒業が認められるようになったのも、当時の「外国学生」の実態に即した対応だったと言えよう。つまり、1904年9月1日付の「外国学生」規定は、1903年に最初の留学生が入学した翌年に「京都帝国大学通則」に追加され、1909年10月に「外国学生」の卒業が規定上で認められたことも、すでに「外国学生」卒業生（1907年）があらわれたことが反映されているのである。

1903年の最初の留学生馬君武の入学から、1909年までの京都帝大の「清国」留学生20人は「外国学生」として在籍した。この時期の留学生は全員「外国学生」の身分であり、一高卒の学生も例外ではなかった。つまり、明治期の京都帝大の「外国学生」は外国籍であることがその定義であり、外国人学生という意味であった。

2. 「外国学生」の身分変更と復活

京都帝大の「外国学生」の枠は、1910年頃からなくなり、在学中の「外国学生」は全員選科の身分に変更された⁽⁵⁴⁾。その後、経済学部が設立された1919年までは「外国学生」枠がなく、留学生たちは、本科生、選科生などとして在籍していた。その理由を示す関連資料は、現時点ではまだ見つかっていない。

1919年5月に京都帝大経済学部は、法科大学から分離されて創設された。『一覧』では経済学部設立当初、中国人留学生は本科生か選科生であったが、1920年1月の「学生及生徒姓名」では「外国学生」枠が設けられ、1917年と1918年に入学した5人の選科生は「外国学生」に変更され、京都帝大の「外国学生」制度が再び動き出した⁽⁵⁵⁾。

資料の「名簿」を作成している過程でわかったのは、大正期からの「外国学生」は、明治時期と異なり、単に外国籍の外国人留学生という意味ではなくなった。前述のように1910年に京都帝大は初めて本科生として三高卒の留学生周作民を受け入れた。同じ年度に「外国学生」の枠がなくなった。1909年に在籍していた「外国学生」は全員（法3人、理2人）選科生の身分に変更され、その後、1910年から1919年まで約10年間「外国学生」は存在しなかった。つまり、明治期では留学生本科生と「外国

「学生」が併存する状況はなく、1910–1919年は京都帝大では留学生を本科生と選科生として受け入れていた。1920年前後に経済学部が「外国学生」を復活させることになると、留学生の中では本科生と「外国学生」が併存する状況となり、「外国学生」を単に国籍で定義づけることができなくなった。

資料「名簿」の経済学部留学生リストからわかるように、本科生はほとんど一高～八高の卒業生であった。1919年に選科生から「外国学生」と身分変更した5人の出身校は不明であるが、おそらく一高～八高以外の教育機関（あるいは一高～八高を中退したなど）の者であろう。ところが、1925年と1926年に経済学部に入学した旧制高等学校卒の留学生8人は、同年の『一覧』「学生及生徒姓名」に本科生ではなく「外国学生」の枠に載っていた。ところが1927年、8人は全員本科生として記載され、「外国学生」から本科生に身分を変更されている。これは、おそらく大正期には、「外国学生」の定義がまだしっかりと定められていなかったことによって引き起こされた事象であろう。

昭和期に入ると、「外国学生」はおおむね一高～八高以外の教育機関（中国の教育機関を含む）の出身者を意味し、留学生本科生とは出身学校によって区別された⁽⁵⁶⁾ようである。

おわりに

京都帝国大学に最初の「清国」留学生が現れたのは1903年のことであり、1926年までに300人を超える（実数307人、延べ人数330人）中国人留学生が京都帝大で学んだ。

「名簿」の情報を分析した結果、京都帝大中国人留学生の特徴がいくつか明らかになった。

「外国学生」制度は京都帝大特有の留学生制度であり、時期によってその定義に変化があった。明治期の「外国学生」は外国人学生の意味であり、外国籍であることで線引きされていた。大正期後半からは留学生本科生と「外国学生」とが併存する状況となり、単に国籍によって判断することができなくなり、結果として定義が曖昧となる転換期といえる。昭和期に入ると、「外国学生」の意味は徐々に明確になり、おおむね一高～八高以外の教育機関（中国の教育機関を含む）の出身者を指し、留学生本科生とは出身学校で区別されたようである。

京都帝大中国人留学生は文系の学生が多くいた。特に1919年に法科大学から分離されて設立された経済学部の留学生の数が多く、79人にのぼった。それは、当時社会学者として名を馳せていた河上肇教授の影響が一番大きかったのではないかと考えられる。

また、入学後に身分を変更した留学生が多いことから、京都帝大は制度の面でも柔軟に留学生に対応したことがわかる。

1908–1922年に実施された「五校特約」協定は、「五校特約生」を誕生させた。彼らの帝大進学は15年続き、中国人帝大留学の第一次ブーム（第二次は1930年代半ば）を引き起こした。帝大生の人数はそれほど多くはなかったが、留学生全体からみると、彼らは帰国後各分野の中核を担う人材となり、中国の近代化の発展に大いに貢献した。

【付記】本論文はJSPS科研費（23K02070）の助成によるものである。本稿の文責はすべて著者にある。資料「名簿」の作成にあたり、道川典子氏の協力があった。ここに謝意を表したい。

注

(1)『九州大学五十年史』(1967年) や『東京大学百年史』通史二(1985年)など。

(2)所澤潤「「外国人留学生取扱ニ関スル調査委員会」(昭和十七〔一九四二年〕年・東京帝国大学)の記録」。

「東京大学における昭和二十年(一九四五年)以前の女子入学に関する資料」(『東京大学史紀要』9, 1991年);「東京帝国大学における大東亜戦争後半期の外国人留学生受入状況——「外国学生指導委員会」の活動を中心——」(『東京大学史紀要』10, 1992年)など;陳昊『近代日本における中国人留学生受け入れに関する

- る研究——明治専門学校、東京・九州帝国大学の事例に即して』九州大学博士論文、2008年10月；折田悦郎等の科学研究費補助金研究成果報告書『九州帝国大学における留学生に関する基礎的研究』2004年3月；永田英明「戦前期東北大学における留学生受入の展開——中国人留学生を中心に——」『東北大学史料館紀要』創刊号、2006年3月；許晨「北海道帝国大学の中国人留学生」『北海道大学大学文書館年報』第5号、2010年3月；許晨「北海道帝国大学における中国人留学生の留学生活」『北海道大学大学文書館年報』第6号、2011年3月。拙論「帝国大学における中国人留学生（1927-1937年）——人数・専攻・類別——」（日本大学理工学部『一般教育教室彙報』第108号、2020年4月）と「帝国大学における中国人女子留学生（1924-1944年）——データ解説と事例分析——」（神奈川大学人文学研究所《人文学研究所報》No.68、2022年）は、昭和初期における七つの帝国大学中国人留学生のデータ分析と女子留学生の実態と特徴を明らかにしたものである。
- (3) 深澤「京都帝国大学における中国人留学生データの解析——昭和初期（1927-1937年）の入学者を中心に——」神奈川大学人文学研究所、No.71、2024年3月、169-193頁。
- (4) 国立国会図書館デジタルコレクション 1927-1942年『京都帝国大学一覧』<https://dl.ndl.go.jp/> (2024年11月1日最終閲覧、以下同じ)。
- (5) 興亜院『日本留学中華民国人名調』1940年など、詳しくは「名簿」の出典を参照。
- (6) 「学生及生徒姓名」明治32年9月末現在、『東京帝国大学一覧』従明治32年至明治33年。407, 429-430頁。
- (7) 「理工科大学学生姓名 外国学生 三十六年入学 馬和 清国」『京都帝国大学一覧』従明治37年至明治38年、81頁；『京都帝国大学一覧』従明治38年至明治39年、88頁。
- (8) 欧正仁『馬君武伝』政協広西壮族自治区委員会、文史資料研究委員会、1982年、12-14頁。
- (9) 劉國銘主編『中国国民党百年人物全書』上、团结出版社、59頁。
- (10) 陳昌春「馬君武先生留德博士學業及師承考与弁析」（馬君武氏のドイツ留学の博士學業及び指導先生に関する考察と分析）科学網—陳昌春博客（科学ネットワーク—陳昌春ブログ）<https://blog.sciencenet.cn/home.php?mod=space&uid=350729&do=blog&quickforward=1&id=1353269>。
- (11) 前掲：劉國銘主編『中国国民党百年人物全書』59-60頁。
- (12) 莫世祥編『馬君武集』華中師範大学出版社、2011年。
- (13) 「……翌三十二年九月清国游学生八名の入学あり、これ外人の本校に入るの初めにして、次いで明治三十七年一月には清国北京大学堂留学生の教養に関する一切の事務を委任せられ先づその三十一名を寄宿寮に入れしめしことありしを看過するをえず」『第一高等学校六十年史』1939年、231頁。
- (14) 「陳治安は二月一日、曾儀進、蘇振潼は二月四日、唐演は三月十七日著校……」「狩野亨吉文書 清国留学生関係文書 留学生に関する報告書（第一年）」東京大学駒場図書館所蔵。
- (15) 1 杜福垣、2 余榮昌、3 景定成、4 範熙壬、5 席聘臣、6 黄藝錫、7 陳發檀、8 王桐齡、9 ○葉克敦、10 蔣履曇、11 王舜成、12 鐘賡言、13 ○陳繼鵬、14 吳宗栻、15 周宣、16 顧德隣、17 朱炳文、18 成雋寓、19 王曾憲、20 屠振鵬、21 張耀曾、22 黃德章、23 朱獻文、24 何培琛、25 史錫倬、26 馮祖荀、27 劉冕執、28 ○施恩曇、29 劉成志、30 朱深、31 ○王蔭泰、32 ○王運震、33 陳治安、34 曾儀進、35 蘇振潼、36 唐演。下線を付しているのはその後京都帝大に進学した者である。
- (16) 「次年度の明治38年（1905）9月になると、確認不可の一名を除く全員が進級し、一年は二年に、延長学級は一年に編入し、速成学級は東京帝国大学または京都帝国大学の選科に進んでいった」。鶴田奈月「清国留学生の学業」展示品概要】前掲：東京大学東アジア藝術文学院ウェブサイトのプロジェクトページ「一高中国留学生与 101 号館歴史展」(2)。
- (17) 「第一高等学校 大学予科卒業者」興亜院『日本留学中華民国人名調』1940年、75-76頁。
- (18) 「中国現代数学の開山鼻祖馮祖荀」（「中国現代数学の創始人馮祖荀」）北京大学新聞網（北京大学新聞ネットワーク）。<https://news.pku.edu.cn/bdrw/137-120167.htm>
- (19) 京都帝大最初の外国人卒業生は、1904年理工科大学に入学したインドのアンピカ・チャラン（1907年7月卒）である。「各分科大学卒業生 明治四十年七月卒業 外国人 アンピカ・チャラン」『京都帝国大学一覧』従明治40年至明治41年、347頁。
- (20) 「附録」『官報』第14期、光緒34（1908）年、151頁。
- (21) 牛亞華「清末留日医学生及其对中国近代医学事業の貢献」『中国科技史料』第24卷第3期、2003年、230頁。

- (22) 「蔣履曾 祇齋 江蘇 京大 南京第一医院長」同仁会編『中華民国医事綜覽』1935年, 371頁。
- (23) 厳平「官立高等教育機関における留学生教育の成立と展開——第三高等学校を事例として——」『京都大学大学文書館研究紀要』第7号, 2009年, 8頁。同論文の「表2: 第三高等学校留学生一覧表(1903-1908)」に京都帝大に進学した3人の卒業生が記されているが、3人の中の章鴻鈞は京都帝大ではなく、東京帝大に進学した(『東京帝国大学一覧』従明治41年至明治42年の「学生生徒姓名」明治41年9月末現在, 92頁)。
- (24) 「卒業生姓名 工学士 採鉱冶金科 明治四十三年七月卒業 厳恩械 清国」『京都帝国大学一覧』従明治43年至明治44年, 81頁。
- (25) 前掲, 厳平「官立高等教育機関における留学生教育の成立と展開」8頁。
- (26) 「本邦留学学生ノ帰国後ニ於ケル状況調査ニ關スル件 昭和九年十一月一日起案」「三高1-135」京都大学文書館所蔵。
- (27) 前掲, 劉國銘主編『中國国民党百年人物全書』下, 1610頁。
- (28) 二見剛史「戦前日本における中国人留学生予備教育の成立と展開」『国立教育研究所紀要』第94集「アジアにおける教育交流——アジア人日本留学の歴史と現状——」1978年3月, 61-80頁; 呂順長「清末「五校特約」留学と浙江省の対応」『中国研究月報』(No. 600), 1998年2月号, 19-30頁; 前掲, 厳平「官立高等教育機関における留学生教育の成立と展開」1-19頁; 厳平「近代中国留学日本大学預科研究——以“五校特約”為中心」『清史研究』2012年11月第4期, 53-62頁; 韓立冬『近代日本の中国留学生予備教育』北京語言大学出版社, 2015年。
- (29) 前掲, 東京大学東アジア藝文学院ウェブサイトのプロジェクトページ「一高中国留学生与101号館歴史展」。
- (30) 前掲, 韓立冬『近代日本の中国留学生予備教育』140-141頁(「表4-5 一高特設予科各年度志願者と入学者統計(1908-22年)」と「表4-8 一高特設予科修了者年度別統計」を参照)。
- (31) 前掲, 厳平「官立高等教育機関における留学生教育の成立と展開」14頁。
- (32) 前掲, 深諭「京都帝国大学における中国人留学生データの解析」170頁。
- (33) 三田剛史『甦る河上肇 近代中国の知の源泉』藤原書店, 2003年, 255頁。
- (34) 同上, 316頁。
- (35) 前掲, 深諭「京都帝国大学における中国人留学生データの解析」を参照。
- (36) 「学生生徒姓名 経済学部 経済学科 大正十年入学 張源祥」(1923年9月末調査)『東京帝国大学一覧』自大正12年至大正13年, 82頁。
- (37) 「京都帝国大学通則」『京都帝国大学一覧』自大正9年至大正11年, 119頁。
- (38) 32「民国8年各帝大在学生冊」中華民国8年10・11月, 中華民国留日学生監督處『中国留日学生監督處文獻』(早稲田大学図書館所蔵)。
- (39) 前掲, 厳平「官立高等教育機関における留学生教育の成立と展開」5, 12-13頁。
- (40) 前掲, 深諭「京都帝国大学における中国人留学生データの解析」178頁。
- (41) 京都帝大の学年の始まりは, 1897年から7月, 1904年からは9月, そして1921年から4月と変更された。([第1編: 法令・規則]「第2章: 通則」京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』【資料編1】京都大学後援会, 1999年, 70, 75, 88頁を参照)。
- (42) 「学生及生徒姓名」大正3年10月末現在, 『京都帝国大学一覧』自大正3年至大正4年, 285頁。
- (43) 「卒業生姓名 法学士 政治学科 大正四年卒業」同上, 320頁。
- (44) 「学生及生徒姓名」大正4年10月末現在, 『京都帝国大学一覧』自大正4年至大正5年, 283頁。
- (45) 前掲, 厳平「官立高等教育機関における留学生教育の成立と展開」12頁。
- (46) 前掲, 『京都大学百年史』71頁。
- (47) 1904年に法科大学に「清国」からの留学生2人(「名簿」を参照)と理工科大学にインドからの留学生アンピカ・チャランが入学。『京都帝国大学一覧』従明治38年至明治39年, 49, 88頁。
- (48) 文部省令第15号「文部省直轄学校外国人特別入学規程」1901年11月11日。
- (49) 「第三十一条 外国人ニシテ入学セントスル者アルトキハ明治三十四年文部省令第十五号ノ定ムル所ニ依リ之ヲ許可ス/第三十二条 外国学生ニハ学生又ハ選科生ニ關スル規定ヲ準用ス」前掲『京都大学百年史』78頁。
- (50) 前掲『京都大学百年史』83頁。
- (51) 「採鉱冶金学科 明治四十年七月卒業 アンピカ・チャラン」, 「電気工学科 明治四十二年十月卒業 プ

- イ・ゼ・ゴーカン」『京都帝国大学一覧』從明治 43 年至明治 44 年, 80-81 頁。
- (52) 「機械工学科 明治四十三年七月卒業 ビー・シー・ボース」, 「電気工学科 明治四十三年七月卒業 ゼー・ゼー・サバンド」同上, 75, 79 頁。
- (53) 前掲『京都大学百年史』91-92 頁。
- (54) 資料「名簿」を参照。
- (55) 『京都帝国大学一覧』自大正 7 年至大正 8 年, 322 頁; 自大正 8 年至大正 9 年, 328 頁。
- (56) 前掲, 拙論「京都帝国大学における中国人留学生データの解析」178 頁。

資料:「京都帝国大学中国人留学生名簿——明治 33—大正 15 (1903-1926) 年の入学者——」

凡例

本名簿は『京都帝国大学一覧』各年版を主な資料として作成した。その他に興亞院の『日本留学中華民国人名調』(以下『人名調』), 清国游学生監督処の『官報』, 中華民国留日学生監督処の『中国留日学生監督処文献』(以下『監督処文献』) 及び日華学会編『留日中華学生名簿』(以下日華学会『名簿』)などの記録から情報を補った。

1. 『京都帝国大学一覧』

『一覧』は一次資料であり, 「学生及生徒姓名」及び「卒業生姓名」の情報は信ぴょう性が高く, 誤記なども少ない。しかし, 出版年や, 統計時期により, すべての年度のデータが網羅されているわけではない。『一覧』各年版の「学生」と「学生及生徒姓名」の調査時期を調べると, 1903, 1913, 1918, 1920, 1928, 1937 年(度)のデータが存在しない。

『一覧』各年版の学生情報調査時期表

『京都帝国大学一覧』時期	名簿名称	調査時期(以下月末日,月初,現在などを省略)
從明治 30 年至明治 31 年	「理工科大学学生姓名」	1997. 12
從明治 31 年至明治 32 年	「京都帝国大学理工科大学学生及生徒姓名」	1998. 12
從明治 32 年至明治 33 年	「学生及生徒姓名」	1900 (1900. 1. 28 発行)
從明治 33 年至明治 34 年	「学生及生徒姓名」	1900 (1900. 12. 16 発行)
從明治 34 年至明治 35 年	「学生及生徒姓名」	1901 (1901. 12. 16 発行)
從明治 35 年至明治 36 年	「学生及生徒姓名」	1902 (1902. 12. 28 発行)
從明治 37 年至明治 38 年	「学生」	1904. 12
從明治 38 年至明治 39 年	「学生」	1905. 12
從明治 39 年至明治 40 年	「学生」	1906. 10
從明治 40 年至明治 41 年	「学生」	1907. 10
從明治 41 年至明治 42 年	「学生」	1908. 10
從明治 42 年至明治 43 年	「学生」	1909. 10
從明治 43 年至明治 44 年	「学生及生徒姓名」	1910. 10
從明治 44 年至明治 45 年	「学生及生徒姓名」	1911. 10
從大正元年至大正 2 年	「学生及生徒姓名」	1912. 10
自大正 3 年至大正 4 年	「学生及生徒姓名」	1914. 10
自大正 4 年至大正 5 年	「学生及生徒姓名」	1915. 11
自大正 5 至大正 6 年	「学生及生徒姓名」	1916. 11

自大正 6 至大正 7 年	「学生及生徒姓名」	1917. 11
自大正 7 年至大正 8 年	「学生及生徒姓名」	1919. 6
自大正 8 年至大正 9 年	「学生及生徒姓名」	1920. 1
自大正 9 年至大正 11 年	「学生及生徒姓名」	1921. 11
自大正 11 年至大正 12 年	「学生及生徒姓名」	1922. 9
自大正 12 年至大正 13 年	「学生及生徒姓名」	1923. 9
自大正 13 年至大正 14 年	「学生及生徒姓名」	1924. 9
自大正 14 年至大正 15 年	「学生及生徒姓名」	1925. 9
自大正 15 年至昭和 2 年	「学生及生徒姓名」	1926. 9
自昭和 2 年至昭和 3 年	「学生及生徒姓名」	1927. 9
昭和 4 年	「学生及生徒姓名」	1929. 4
昭和 5 年	「学生及生徒姓名」	1930. 8
昭和 6 年	「学生及生徒姓名」	1931. 12
昭和 7 年	「学生及生徒姓名」	1932. 12
昭和 8 年	「学生及生徒姓名」	1933. 10
昭和 9 年	「学生及生徒姓名」	1934. 10. 1
昭和 10 年	「学生及生徒姓名」	1935. 9. 3
昭和 11 年	「学生及生徒姓名」	1936. 8. 31
自昭和 12 年至昭和 13 年	「学生及生徒姓名」	1938. 3. 31
昭和 14 年度	「学生及生徒姓名」	1939. 3. 31
昭和 15 年度	「学生及生徒姓名」	1940. 3. 31
昭和 16 年度	「学生及生徒姓名」	1941. 5. 1
昭和 17 年度	「学生及生徒姓名」	1942. 5. 1

『一覧』の中国人留学生の出身国に関する表記は、時期により、清國→支那→中華民国（中華）・満州國（満洲）と変化している。留学生の省籍・出身校・経費の情報は収録されていない。「名簿」では、国名を省略し、代わりに『一覧』以外の資料で判明した省籍を記載した。

在学中に氏名の変わった者が複数いた。昭和期の『一覧』では、改名した留学生には注釈が加えられていたので判断しやすかったが、明治大正期の『一覧』にはそういう注釈がなかった。また、『一覧』の「卒業生姓名」から判断すると在学中とされる時期に「学生及生徒姓名」には見あたらない者がいるなど、『一覧』と『人名調』の卒業生の氏名が一致しないこともあった。こうした現象は、当時の中国人が「名」「字」「号」を持っていた慣習と関連しているが、それ以外に誤記の可能性も否定できない。同一人物だと思われる学生のデータについては、その情報を一行増やして追加した。

例えば、1921-1923 年度の在学生であった法学部付番 54 の李淇は、卒業者名簿では李淇（「学生及生徒姓名」には存在しない氏名）とされている。他の資料の記録を参照して両者は同一人物と判断した。

同じ法学部付番 65 の陳亮は、『人名調』の卒業者名簿にその名が見つからず、代わりに張亮という氏名があった。張亮は七高出身と記録されていたので、「第七高等学校」の卒業者名簿を調べてみると、張亮は存在せず、陳亮の名があった。『一覧』と七高卒業者名簿の情報から、『人名調』の張亮は陳亮の誤記と思われる。

2. 『人名調』・『官報』・『監督処文献』・日華学会『名簿』からの補足

資料「名簿」の作成にあたり、各留学生の省籍は上記の四つの資料から補足した。出身校はほとんど『人名調』と日華学会の『名簿』の情報によるものであり、費別は『人名調』以外の三つの資料に基づいている。

『人名調』は卒業生を中心とした名簿であり、省籍と出身校（一部）の情報が掲載されているが、中華民国出身者しか収録されていない。満洲地域の出身者と卒業していない留学生の記録はなく、費別の統計もない。

清国游学生監督処の『官報』は、1907年初（光緒32年12月）～1911年初（宣統12月）の4年間のみ発行されたものであり、連続した情報としては記録が少ない。

中華民国留日学生監督処の『監督処文献』は、中華民国成立後から1923年までの情報を扱う資料である。1914年に監督処が初めて留学先の学校別に調査を行い、4冊の官私立学校留学生名簿を作成した。その第1冊には京都帝大の留学生名簿が含まれているが、費別の情報はなかった。全体的に見ると、『監督処文献』は官費生の情報資料が圧倒的に多く、詳細な統計表は1918～1921年に集中している。

日華学会『名簿』は、1927年から18年続けて刊行されており、省籍・費別・出身校のデータがそろっている。しかし、1927年に在籍していた学生及び1927年以降のデータについては詳しいものの、それ以前の留学生のデータは存在しない。

以上のように、資料「名簿」を補足するために使用した各資料については、その調査対象や時期及び収録項目が異なり、系統的といえるものは少ない。

省籍と出身校のデータについては、『人名調』の記録が詳細だが、「満洲國」や東北地方出身者及び卒業生していない留学生の情報は調査対象ではないため、存在しない。それらの情報について、「名簿」では『人名調』以外の三つの資料により補った。

費別に関しては、『官報』の「京都帝国大学学生表」（1907年）と「京都帝国大学在学各生最近調査表」（1909年）が詳しいが、他の年度の記録は見当たらない。『監督処文献』には詳細な費用データが載っている統計表があるが、1918年から1921年までの数年分の情報しかなかった。そのため「名簿」の留学生の費別に関しては、不明な部分が多い。ただし、確認できた年度のデータから明治期も大正期も帝大本科生のほとんどは官費生であったと考えられる。

「卒業年月」に関しては、ほぼ『一覧』のデータによるが、『人名調』には『一覧』に記録がない15人分の氏名が記載されていた。『一覧』の記録と区別するために、15人の卒業年に下線を付け、資料「名簿」に記入した。下線付きのデータから見ると、選科生の数が12人と多く、「外国学生」は3人であった。『人名調』の名簿を作成する際、依頼された京都帝大の担当者は、卒業生だけではなく選科などを修了した学生も名簿に入れたと思われる。ただ、『人名調』作成の方針によるものかどうかを確認できる資料はまだ見当たらない。

これらの資料（『官報』や『中国留日学生監督処文献』など）は、連続した統計情報を扱っているものは少なく、統計対象（『人名調』は中華民国出身の卒業者のみ収録）も異なっているものの、各留学生の省籍、出身校に関する情報をかなり補足することができた。費別のデータは少なかったが、留学生本科生がほとんど官費生であったことは、費別の判明している年度の記録から読み取ることができた。

3. 項目欄の説明

本名簿は、学生を学部別に入学年度順に、入学年度が不明な場合には在籍年度順に並べた。同じ年度の場合は本科生、「外国学生」、選科生、専修科生、介補、雇員などの順に配列した。

「学科または専攻」：分科大学及び学部の学科または専攻を以下のように略記した。法科大学・法学部の法律学科、政治学科、政治経済学科を法、政、政経；医科大学・医学部の医学科を医；理工科大学・工科大学・工学部の物理学科、土木工学科、機械工学科、電気工学科、採鉱冶金学科、工業化学科を物理、土木、機械、電気、採鉱冶金、工化；文科大学・文学部の哲学科、史学科、文学科を文、史、哲；理科大学・理学部の数学、物理学、地球物理学、化学、動物学、植物学、地質学鉱物学を数学、物理、地球物理、化学、動物、植物、地鉱；農学部の農学科、農林化学科、農林経済学科を農、農林化、農林経。

「身分」：身分の種類には、「外国学生」、本科生、大学院生、選科生、専修科生、研究、介補、雇員があり、本項目欄では外、本、院、選、専、研、介と略記し、雇員はそのままにした。

「入学・採用・嘱託年月」：『一覧』と日華学会の「名簿」に基づく情報であるが、それらのデータが欠けている場合は、他の資料から情報を記入した。

「卒業年月または大学院生の研究テーマ」：本科生の卒業年月はほとんど『一覧』の「卒業生姓名」によるものだが、下線付きは『人名調』の記録である。大学院生の研究テーマは、『一覧』各年版の「学生及生徒姓名」にある「大学院学生」に記載された情報である。

「出身校」：基本的に略称で表記した。

「費別と受領年」：『監督処文献』の統計表の中央官費と省官費は、すべて「官」とした。日華学会『名簿』で

は年度によって費用の名称が異なる記録があるが、官、省費、省官費は「官」に、省公費・公費は「公」に、補・文化補・文化補給などは「補」、選抜は「選」と略記した。

「在籍年度（年・月）」：ほとんど『一覧』によるものであるが、二重下線の引いている部分は、筆者が推測したものである。京都帝大の学年の始まりは、1897年から7月、1904年からは9月、そして1921年から4月と変更された。

「備考」：注記すべき内容や出典資料から補うべき情報を記した。

名簿作成にあたって誤記や遗漏などは避けられないことであるが、本資料が京都帝大中国人留学生研究の一助となれば幸いである。

	姓名	省籍	学科ま たは専 攻	身分	入学・ 採用・ 嘱託年 月	卒業年月ま たは大院生 の研究テー マ	在籍年度 (年・月)	出身校	費別と受領年 (1907, 1909, 1918-1921, 1927年前後以 外は不明)	備考	出典
法（法科大学→1919年から法学部）87人											
1	廉(廉) 隅	江蘇		外	1904		1904-1906		官 1907		①⑤
2	程明超	湖北		外	1904		1904-1906		官 1907		①⑤
3	曾儀進	四川		外	1905		1905-1907	一高	官 1907		①④⑤
4	顧德隣	直隸		外	1905		1905-1907	一高	官 1907		①④⑤
5	黃德章	四川		外	1905		1905-1907	一高	官 1907		①④⑤
6	朱獻 (獻)文	浙江		外	1905		1905-1907	一高	官 1907		①④⑤
7	陳爾錫	湖南		外	1906		1906-1908		官 1907・1909		①⑤
8	盧籍剛	廣東		外	1906		1906-1909		官 1907・1909		①⑤
9	屠振鵬	江蘇	政	外	1908		1908-1909	一高	官 1909		①④⑤
			政	選			1910				①
10	席聘臣	雲南	政	外	1908		1908-1909	一高	官 1909		①④⑤
			政	選			1910				①
11	范熙壬	湖北	政	外	1908		1908-1909	一高	官 1909		①④⑤
			政	選	1909		1910				①
12	周作民	江蘇	法	本	1910		1910	三高			①⑦
			政	本			1911-1918				①⑥
13	李著強	湖南	政	選	1911		1911-1919				①⑥
14	向瑞彝	湖南	政	選	1911		1911-1919				①⑥
15	朱念祖	江西	政	選	1911		1911-1919				①⑥
16	畢 厚	湖南	政	選	1911		1911-1919				①⑥
17	曾天宇		政	本	1912		1912				①
18	梅詒經	浙江	政	選	1912		1912-1913	検定・三高中退			①②⑦
				本		1915.7	1914				①
19	張承運	湖北	政	選	1912		1912-1914	検定		⑥江蘇	①②⑥
				本		1915.7	1914				①
20	毛頌芬	湖北	政	選	1912		1912-1914	検定・三高中退			①②⑦
				本		1915.7	1914				①
21	劉鴻漸	浙江	政	選	1912		1912-1914	検定			①②
				本		1915.7	1914				①

22	蔡 錚		政經	選	1914		1914-1915					(1)
23	黃天評		政經	選	1914		1914-1916					(1)
24	鄒崇 (宗)孟 (猛)	湖北	政經	本	1915	1918. 7	1915-1917	七高				(1)(2)(6)
							1919		官 1919			(6)
25	羨鐘寅		政經	選	1915		1915-1917					(1)
26	王銳生	江蘇	政經	本	1916		1916-1918	四高	官 1918-1919			(1)(2)(6)
						1919. 7	1918					(1)(2)(6)
27(經 1)	杜國庠	廣東	政經	本	1916		1916-1918	一高	官 1918	1919 年經濟學部へ		(1)(6)
28(經 2)	鄧紹先	雲南	政經	本	1916		1916-1918	七高	官 1918-1919	1919 年經濟學部へ		(1)(2)(6)
29	甘浩澤	廣西	政經	本	1917		1917-1918	二高	官 1918-1920			(1)(2)(6)
						1920. 7	1919-1919					(1)(2)(6)
30	馬洪煥	廣東	法	本	1917	1920. 7	1917-1919	檢定	官 1918-1921			(1)(2)(6)
							比較行政法	1921				(1)(2)(6)
31(經 3)	何品佳	廣東	政經	本	1917		1917-1918	七高	官 1918	1919 年經濟學部へ		(1)(6)
32	金子綱	奉天	法	選	1917		1917-1919					(1)(6)
33	陳祐時		政經	選	1917		1917					(1)
34(經 4)	何崧齡	福建	政經	選	1917		1917-1918			1919 年經濟學部へ (7)三高中退		(1)(6)(7)
35	黃元彬	廣東	政	本	1918	1921. 3	1918-1920	三高	官 1918-1920			(1)(2)(6)
36(經 5)	李希賢	湖南	政經	本	1918		1918	六高	官 1918-1921	1919 年經濟學部へ		(1)(2)(6)
37(經 6)	黃興元	廣東	政經	本	1918		1918	一高	官 1918-1920	1919 年經濟學部へ (2)黃典元		(1)(2)(6)
38(經 7)	朱公準	廣東	政經	本	1918		1918	三高	官 1918-1920	1919 年經濟學部へ		(1)(2)(6)
39(經 8)	戎春田	直隸	政經	本	1918		1918	二高	官 1918, 1920-1921	1919 年經濟學部へ		(1)(6)
40	陳海臣	江蘇	法	選	1918		1918-1922					(1)(6)
							1923	1923				(1)(2)
41	陳銅 (綱)		政	選	1918		1918-1919			(6)綱		(1)(6)
42(經 9)	張繕 (階)	直隸	政經	選	1918		1918			1919 年經濟學部へ		(1)(6)
43(經 10)	李國權	廣東	政經	選	1918		1918			1919 年經濟學部へ		(1)(6)
44(經 11)	于樹德	直隸	政經	選	1918		1918			1919 年經濟學部へ		(1)(6)
45(經 12)	安體誠 (德)	直隸	政經	選	1918		1918			1919 年經濟學部へ		(1)(6)
46	周繼駢	四川	法	本	1919	1922. 3	1919-1921	二高	官 1920-1921			(1)(2)(6)
47	龍守賢	四川	政	本	1919	1924. 4	1919-1924	二高	官 1920-1921			(1)(2)(6)
48	何春帆	廣東	政	本	1919	1922. 3	1919-1921	五高	官 1920-1921			(1)(2)(6)
49	羅超彥	湖南	政	本	1919	1922. 3	1919-1921	八高	官 1920-1921			(1)(2)(6)
50	陳錫符	江西	法	本	1920	1924. 7	1920-1924	七高	官 1921			(1)(2)(6)
51	龍守榮	四川	法	本	1920	1923. 3	1920-1922	二高	官 1921			(1)(2)(6)
52	李耀商	雲南	政	本	1920	1923. 3	1920-1922	檢定	官 1921			(1)(2)(6)
53	吳瀚濤	吉林					1921		官 1921	法科 一年級		(6)

	李 淵	廣東	政	本	1921		1921-1923	三高	官 1921	②⑥李淇	①②⑥
54	李 淵					1924. 3					①
			院			法理学	1926-1927				①
55	韓樹業	吉林	政	本	1921	1926. 4	1921-1926	三高	官 1921		①⑥⑦
56	薩孟武	福建	政	本	1921	1924. 3	1921-1923	三高	官 1921		①②⑥
57	齊世長	奉天	政	本	1921		1921		官 1921		①⑥
58	殷劍秋		法	本	1923		1923				①
	殷德洋	湖南	法	本	1923	1926. 4	1923-1926	三高			①②
59	趙修興 (鼎)	福建	法	本	1923	1926. 4	1923-1926	八高			①②
60	李 隆	江西	法	本	1923	1926. 4	1923-1926	七高			①②
61	徐家桓		法	本	1923	1926. 3	1923-1925				①
62	張樹森	奉天	政	本	1923		1923-1928	五高	官 1927-1928		①③
63	雷 震	浙江	政	本	1923	1926. 3	1923-1925	八高			①②
			院	1926		米国憲法	1926-1928				①③
64	張有樞	江西	法	本	1924	1927. 3	1924-1926	七高			①②
			院			都市行政及 法制	1927-1930				①③
65	陳 亮	安徽	法	本	1924	1927. 3	1924-1926	七高			①②
	張 亮		法			1927		七高		②張亮は誤記	②
66	劉經旺	湖南	法	本	1924	1928. 3	1924-1927	一高	補 1927		①②③
67	王褒一	湖北	法	本	1924	1927. 3	1924-1926	六高			①②
68	朱顯禎	四川	法	本	1924	1927. 3	1924-1926	三高			①②
			院	1928		労働法	1927-1930		補 1928		①③
69	蕭家駿		法	本	1924		1924-1925	七高			①②
70	林式增	湖南	政	本	1924	1927. 3	1924-1926	一高			①②
71	楊偉標	浙江	政	本	1924	1927. 3	1924-1926	五高			①②
72	金 庸	湖北	政	本	1924	1927. 3	1924-1926	五高			①②
73	陳 章	奉天	法	本	1925	1928. 3	1925-1927	三高	官 1927		①③
74	李允森	浙江	法	本	1925	1928. 3	1925-1927	五高	官 1927		①②③
			院	1928		労働法	1928-1930	京大法	補 1928		①③
75	蘇道權	湖北	法	本	1925	1928. 3	1925-1927	五高	官 1927		①②③
			院	1928		民事訴訟法	1928-1930	京大法	補 1928		①③
76(経 17)	金正驥 (愚)	湖南	法	本	1925		1925-1929	四高 · 京大経	官 1927-1929	②金正驥	①②③
77	林定平	湖南	政	本	1925	1928. 3	1925-1927	七高	官 1927		①②③
			院	1928		國際公法	1928-1930	京大法	官 1928		①③
78	楊開甲	湖南	政	本	1925	1928. 3	1925-1927	五高	補 1927		①②③
79	張嘉賓	奉天	法	本	1926	1929. 3	1926-1928	一高	補 1927-1928		①③
80	林喜泰	奉天	法	本	1926	1929. 3	1926-1928	三高	官 1927-1928		①③
81	王惠中	貴州	法	本	1926	1929. 3	1926-1928	六高	補 1927-1928		①②③
82	王英生	江西	法	本	1926	1930. 3	1926-1929	山形高校	官 1927-1929		①②③

83	余(餘) 輩(群) 宗	四川	法 院	本	1926	1929. 3	1926-128	三高	官 1927-1928		①②③ ①
84	雷榮珂	广西	法 院	本	1926	1929. 3	1926-1928	六高	官 1927-1928		①②③ ①③
85	胡恭先	四川	法	本	1926	1929. 3	1926-1928	大阪高校	官 1927-1928		①②③
86	蔣惠道	江西	法	本	1926	1929. 3	1926-1928	六高	官 1927-1928		①②③
87	徐日從	江西	法	本	1926	1929. 3	1926-1928	六高	官 1927-1928		①②③
医 (医科大学→1919年から医学部) 19人											
1	蔣履曾	江蘇	医 外	1905	1910. 3	1905-1909	一高	官 1909		①②④ ⑤	
2	厲家福	浙江	医			1909		官 1909	医, 第一年級	⑤	
3	李国幹 (博仁)	湖北	医 院	本	1915	1919. 11	1915-1919	二高	官 1918-1919	②内科	①②⑥
	李国幹					1920-1921		官 1920-1921	⑥大学院	⑥	
4	孫孝寬	貴州	医	本	1916	1920. 9	1916-1920	三高	官 1918-1921		①②⑥
5	桂毓泰	陝西	医	本	1918	1922. 7	1918-1922	二高	官 1918-1921		①②⑥
6	陶烈	江蘇	医	本	1919	1923. 6	1919-1923	一高	官 1918-1921	②精神科	①②⑥
			院	1923	生理学	1924				①	
7	溫泰華	廣東	医	本	1919	1923. 6	1919-1923	五高	官 1920-1921	②小兒科	①②⑥
8	楊達 (九)	廣東	医	選	1919		1919			⑥楊達九	①⑥
9	林聰明	福建	医	研		1919			医 研究	⑥	
10	阮振鐸		医	專	1921		1921				①
11	江華縉	湖北	医	研		1921		官 1921	医 研究	⑥	
12	候宗廉		医	專	1922		1922-1923				①
13	林國祥 (陽)	浙江	医	本	1924		1924-1927	千葉医專			①③
14	林鏡平		医	本	1924		1924				①
15	石增榮	奉天	医	專	1924		1924-1927	南滿医学 堂	官 1927		①③
16	趙師震	江蘇	医	本	1925		1925-1927	千葉医專			①③
17	薛承堯	湖北	医	本	1926	1930. 3	1926-1929	五高	官 1927, 1929, 補 1928		①②③
			副	1930. 4		1930-1935			補 1930-1932, 選 1933	1930-1931年に大学 院生の記録もある	③
			院	1935. 9	整形外科学	1935-1937					①③
			嘱	1938		1938				外科嘱託	③
			副	1941		1941-1942				外科副	③
18	李維民	吉林		介	1926. 1		1925-1928	南滿医学 堂	補 1927		③
				專	1928		1928-1931		官 1930-1931		①③
19	劉曜曦	奉天		雇員	1926. 1		1925-1927	南滿医学 堂			③

	工（理工科大学→1914年工科大学に→1918年から工学部）74人									
1	馬和 (君武)	廣東		外	1903	<u>1906</u>	1903-1905			②工化 ①②
2	嚴恩機	江蘇	採鉱冶金	外	1907	1910. 7	1907-1909	三高		①②
3	張景光	江蘇	採鉱冶金	外	1907	1910. 7	1907-1909	一高	官 1909	①②⑤
4	劉銓			外	1908		1908-1910			①
5(理 10)	胡濬濟	浙江		外	1908		1908	一高		①②
6	馮祖荀	浙江		外	1908		1908-1909	一高	官 1909	⑤第一年級 ①④⑤
			選	1910			1910-1911			①
7	范銳			外	1909		1909			①
		湖南		選	1910	<u>1912</u>	1910-1911	六高		②工化 ①②
8	葉緒畔	浙江	採鉱冶金	本	1910	1914. 7	1910-1912	五高		1914年工科大学へ ①②⑥
9(理 1)	蘇振潼	江蘇	物理	本	1910		1910-1913	一高		1914年理科大学へ ①④⑥
10(理 2)	張貽惠	安徽	物理	本	1910 · 1911		1910-1913	東京高師		同上 ①②⑥
11(理 3)	郭鴻鑾	四川		選	1910		1910-1913			同上 ①⑥
12	傅銳			選	1910		1910-1913			①
		浙江	土木	本	1914	1915. 7	1914			1914年工科大学へ ①②⑥
13	文永言	江西	採鉱冶金	選	1911	<u>1917</u>	1911-1915	六高		同上 ①②⑥
14	黃家驥			選	1911		1911-1912	六高		①②
15	沈化夔	浙江	採鉱冶金	本	1912	1916. 7	1912-1915	八高		1914年工科大学へ ①②⑥
16	彭道中	湖南	土木	本	1913	1916. 12	1913-1916	六高		同上 ①②⑥
17	張惟和	江西	土木	本	1913	1917. 7	1913-1916	八高		同上 ①②⑥
18	梁強	浙江	土木	本	1913	1916. 7	1913-1915	六高		同上 ①②⑥
19	胡光旭	四川		選	1914	<u>1918</u>	1914-1919	六高	官 1918-1919	同上 ⑥採治 ①②⑥
20	楊蔭蘿	湖北	土木	本	1915	1920. 3	1915-1919	五高	官 1918-1920	1919年工学部へ ①②⑥
21	孫鶴雲	山東	採鉱冶金	本	1915	1918. 9	1915-1918	八高	官 1918-1919	①②⑥
22	胡嘉紹	江西	土木	本	1916	1919. 12	1916-1919	二高	官 1918-1919	1919年工学部へ ①②⑥
23	何壽祥	浙江	土木	本	1916	1920. 7	1916-1919		官 1918-1919	同上 ①②⑥
24	丁瑞霖	湖北	採鉱冶金	本	1916	1919. 10	1916-1919	五高	官 1918-1921	同上 ①②⑥
25	方家燿	湖北	採鉱冶金	本	1917	1921. 3	1917-1920	八高	官 1919-1921	同上 ①②⑥
26	周敏	湖北	採鉱冶金	本	1917	1920. 7	1917-1919	六高	官 1918-1920	同上 ①②⑥
27	高鍔	浙江	工化	本	1917	1920. 7	1917-1919	六高	官 1918-1919	同上 ①②⑥
28	戴鴻儒	四川	採鉱冶金	本	1918	1921. 6	1918-1921	三高	官 1918-1921	同上 ①②⑥
			院	1921	鑄床学一般	1921-1923				①

29	胡源深	直隸・河北	採鉱冶金	本	1918	1923. 3	1918-1922	五高	官 1918, 1920-1921	1919 年工学部へ	①②⑥
	胡直誠	河北	採鉱冶金			1923		五高			②
30	周斯銘	廣東	採鉱冶金	本	1918	1921. 4	1918-1921	三高	官 1918-1920	1919 年工学部へ	①②⑥
31	毛競先	湖南	採鉱冶金	本	1918	1921. 3	1918-1920	三高	官 1918-1921	同上	①②⑥
32	張 樹	山東	土木	本	1919	1922. 3	1919-1921	六高	官 1919-1921		①②⑥
33	徐世民	湖北	土木	本	1919	1922. 3	1919-1921	六高	官 1920-1921		①②⑥
34	白銘璋	奉天	採鉱冶金	本	1919	1923. 3	1919-1922		官 1919-1921		①⑥
35	彭維基	湖南	採鉱冶金	本	1919	1922. 3	1919-1921	三高	官 1920-1921		①②⑥
36	雷 宣	江西	採鉱冶金	本	1919	1922. 3	1919-1921	一高	官 1919-1921		①②⑥
37(經 43)	江 鐵 (鐵)	江蘇	採鉱冶金	本	1919	1922. 6	1919-1922	八高	官 1920-1921	卒業後經濟學部へ	①②⑥
38	吳和宣	安徽	土木	選	1919		1919-1923				①⑥
39	于長富	奉天	機械	本	1920	1924. 3	1920-1923		官 1921		①⑥
40	黃秉哲	廣東	機械	本	1920	1925. 2	1920-1924	三高	官 1921		①②⑥
41	歐(陽) 超遠	湖南	採鉱冶金	本	1920	1924. 3	1920-1923	三高	官 1921		①②⑥
42	曾濟實	四川	工化	本	1920	1923. 3	1920-1922		官 1921		①②⑥
43	張昌熙	浙江	土木	本	1921	1925. 3	1921-1924	二高	官 1921		①②⑥
44	劉作樞	湖南	土木	本	1921	1924. 10	1921-1924	四高	官 1921		①②⑥
45	高凌美	湖北	土木	本	1921	1925. 3	1921-1924	四高	官 1921		①②⑥
46	劉均衡	廣東	電気	本	1921	1926. 3	1921-1925	六高			①②
47	虞紹唐	浙江	電気	本	1921	1924. 3	1921-1923	二高	官 1921		①②⑥
			院			高周波電気 工学	1926-1928		補 1927, 外特 1928		①③
48	黃詮 (全)	湖南	採鉱冶金	本	1921	1924. 3	1921-1923	二高	官 1921		①②⑥
49	江聖達	浙江	採鉱冶金	本	1921		1921-1922	六高	官 1921		①②⑥
			選	1923	1925	1923-1924	四高				①②
50(理 16)	張定釗	江西	工化	本	1921		1921	一高	官 1921	1922 年理學部へ転 部	①②⑥
51(文 18)	傅書邁	江西	工化	本	1921	1925. 3	1921-1924	八高		卒業後文學部へ	①②③
52	蕭定先	江西	土木	本	1921	1926. 3	1921-1925				①②
53	韓祖望	浙江	工化	本	1922	1925. 3	1922-1924				①②
			院	1925	纖維工業	1925-1926					①
54	濱(洪) 瑞棻	浙江	工化	本	1922	1925. 3	1922-1924				①②
55	許世墉		工化	本	1922	1926. 3	1922-1925				①

56	陳華燦		採鉱冶金	本	1923		1923					①
		湖南	土木	本		1926. 3	1924-1925	六高				
57	鄭錦榮		電気	本	1923	1927. 3	1923-1926					①②
58	魏岳壽	浙江	工化	本	1923	1926. 3	1923-1925	二高				①②
59	朱 狹	浙江	工化	本	1923	1926. 3	1923-1925	二高				①②
60	張連科	貴州	採鉱冶金	選	1923	<u>1926</u>	1923-1925	なし				①②
61	王者貴		土木	本	1924		1924-1926					①
	王 達		土木	本		1927. 3						①
62(理 21)	金華(萃)鋪	湖北	機械	本	1924	1928. 10	1924-1928	三高		理学部から転部		①②③
63	鄧裕鎧	湖南	工化	本	1924	1928. 3	1924-1927	八高				①②③
				院	1928	水金ノ製造 二閑スル事項	1928-1929	京大工				①③
64	陳乘直	四川	工化	本	1924	1928. 3	1924-1927	三高	補 1927			①②③
				院	1928		1928	京大工	補 1928			③
65	余緯斯		工化	本	1924		1924-1927					①
66	劉 嚴		採鉱冶金	本	1925		1925	松山高				①②
67	曾昭崑			選	1925		1925-1926					①
68	張公昶	廣東	土木	本	1926		1926-1928	八高	官 1927-1928			①②③
	張公一		土木			1929. 3						①
69	萬斯選	江西	土木	本	1926	1929. 3	1926-1928	六高				①②③
70	袁汝誠	貴州	土木	本	1926	1930. 3	1926-1929	二高	補 1928			①②③
71	鄉(卿)芳荃	湖南	採鉱冶金	本	1926		1926-1927	二高				①③
72	扶學銑		採鉱冶金	本	1926		1926					①
73	張焯福	山西	工化	本	1926	1929. 3	1926-1928	八高				①②③
74	朱季煒(焯)	廣東	工化	本	1926	1929. 3	1926-1928	六高				①②③

文（文科大学→1919年から文学部）23人

1	夏錫祺	浙江	哲	外	1906	<u>1909</u>	1906-1908					①②
2	曾 菱	廣東	哲	選	1913		1913-1914					①⑥
3	朱秩如	廣東	史	本	1919	1922. 3	1919-1921	五高	官 1920-1921			①②⑥
4	張黃(鳳擧)	江西	文	本	1919	1922. 3	1919-1921		官 1919-1921			①②⑥
5	曹世鈞	直隸・河北	哲	選	1919	<u>1922</u>	1919-1921		官 1920-1921			①②⑥
6	陳楷之	直隸・河北	史	選	1919	<u>1922</u>	1919-1921		官 1920-1921			①②⑥
7	蘇 霖	雲南	哲	本	1920		1920-1924		官 1921			①⑥
8	鄭伯奇	陝西	哲	本	1922	1925. 3	1922-1924	三高		②陝西		①②
		江西		院	1925	社会心理学	1925-1929		補 1927	③江西		①③
9	范 揚		文	本	1923		1923					①

10	彭 堅	江西	哲	本	1924		1924-1929	七高	補 1927-1928		①③
11	馮乃超		哲	本	1924		1924				①
12	張心沛		哲	本	1924		1924			工学士	①
	周學普	浙江	文	本	1924	1928. 3	1924-1927	六高	官 1927		①②③
13	周學普 (晉)	浙江	院	1928	獨伊の浪漫 主義文学に 就て	1928-1929	京大文	官 1928			①③
14	徐增明	浙江	哲	選	1924		1924-1929	東京高師			①③
15	方光燾		史	選	1924		1924				①
16	李聲萃 (華)	湖北	哲	本	1925		1925-1929	三高	官 1927-1928		①②③
17	李初梨	四川	文	本	1924		1924-1929	五高	補 1927		①③
		文	本	1925	1928. 3	1925-1927	八高・京 大工	官 1927	卒業後文学部へ		①②③
18(工 51)	傅書邁	江西	院	1928	平安朝文学 に及ぼせる 漢文学の影 響	1928-1930		官 1928			①③
19	戴宏猷		哲	選	1925		1925-1926				①
20	宋文權	湖北	哲	選	1925		1925-1929	東京高師	官 1927-1928		①③
21	文聖擎	四川	史	本	1926		1926-1929	廣島高師	官 1927-1928		①③
22	張夢麟	貴州	文	本	1926	1930. 3	1926-1929	八高	補 1927-1928	英文学専攻	①②③
23	虞中匡	浙江	文	本	1926		1926-1929		補 1927-1928		①③
理 (理工科大学から分離→1914 年理科大学に→1919 年から理学部) 44 人											
1(工 9)	蘇振潼	江蘇	物理	本	1910		1910-1915			理工科大学から	①⑥
2(工 10)	張貽惠	安徽	物理	本	1910 · 1911	1915. 7	1910-1914	東京高師		理工科大学から	①②⑥
3(工 11)	郭鴻鑾		選	1910		1910-1913				理工科大学から	①
	四川	物理	本	1914	1914. 12	1914				②河北	①②⑥
4	謝寶善	直隸		本	1915		1915-1919	七高	官 1918, 1920		①②⑥
5	陳象岩	湖北	化学	本	1916	1920. 7	1916-1919	七高	官 1918, 1920- 1921		①②⑥
6	田明雯	江西		本	1918	1921. 3	1918-1920	三高	官 1918-1921		①②⑥
7	陶致遙 (遠)	江蘇		選	1918		1918				①⑥
8	晋集仁	山西		選	1919		1919-1922		官 1921		①⑥
		数学	本		1923. 5	1923					①②
9	薛培元	直隸		選	1919		1919		官 1920	物化	①⑥
10(工 5)	胡濬濟	浙江				1919-1920		一高	官 1919-1920	(6) 1 年級, 解析數 學(1919 年); 理科, 研究(1920 年)	②⑥
11	符松友	四川				1919				1 年級, 純正化学	⑥
12	孫 眇	山東		選	1919		1919	二高		②孫 肝, 山東 ⑥ 1 年級, 民國 8 年 9 月入学, 理, 選科	②⑥

13	沈林惠		数学	本	1920		1920-1923				①
			地球物理	本		1924. 4	1924				
14	陳建功	浙江					1920-1921		官 1921	理, 2 年級	⑥
15	沈懋德	四川					1920-1921	東京高師	官 1921	理, 2 年級	②⑥
16(工 50)	張定釗	江西	化学	本	1922	1924. 3	1922-1923	一高		工学部から転部	①②
17	宋(宗)文政	湖北	化学	本	1922	1925. 3	1922-1924	二高			①②
	宋父政		院	1925	立体化学	1925					①
18	高昌達	貴州	化学	本	1922	1925. 3	1922-1924				①②
19	胡哲齊		動物	本	1922		1922-1924	東京高師			①②
20	吳熙	四川	数学	本	1923		1923-1928	東京高師			①②③
21(工 62)	金華錦	湖北	数学	本	1923		1923	三高		工学部へ転部	①②
22	程祥榮	浙江	化学	本	1923	1926. 6	1923-1926	東京高師			①②
			院		生物化学	1926-1929	京大理	補 1927, 外特 1928			①③
23	魯同衡	直隸		選	1923		1923-1928	専門学校		③数学	①③
24	戴運軌	浙江	物理	本	1924	1927. 10	1924-1927	東京高師	公 1927		①②
25	楊毓楨	直隸・ 湖北	物理・ 化学	本	1924	1930. 3	1924-1929	広島高師	補 1927-1929	②湖北	①②③
26	陳之 (上)霖	浙江	化学	本	1924	1927. 3	1924-1926	東京高師			①②
			院	1928	物理化学	1928	京大理				①③
27	董聿茂	浙江	動物	本	1924	1928. 3	1924-1927	東京高師	公 1927		①②③
			院	1928	動物形態学	1928-1929	京大理	公 1928, 官 1929			①③
28(経 35)	竺萃雲	浙江	地歎	本	1924		1924	東京高師		②竺華雲, 浙江, 理三甲; 経済学部 から	①②
29	俞元鑄	浙江	地歎	本	1924	1928. 3	1924-1927	東京高師	公 1927	卒業後法学部へ	①②③
30	梁士悌	廣西	数学	本	1925		1925-1929	東京高師	補 1928-1929		①③
31(農 4)	曹鼓晨	奉天	数学	本	1925		1925-1928	佐賀高校		1926 年農学部にも 在籍	①③
32	章克標	浙江	数学	本	1925		1925-1928	東京高師			①②③
33	石潮白 (自)	湖南	物理	本	1925		1925-1929	一高	公 1929		①③
34	郁樹錕	江西	物理	本	1925		1925-1928	東京高師			①②③
35	李鵬迅	直隸	物理	本	1925		1925-1929	六高	補 1927-1929		①③
36	閔桐華 (萃)	直隸・ 河北	化学	本	1925	1928. 3	1925-1927	広島高師	補 1927	②河北北京	①②③
	閔桐 (相)華	奉天・ 河北	院		生物化学	1928-1936	京大理	補 1928-1929	③昭 6. 7 帰国		①③
37	金溥瑩	湖北	動物	本	1925		1925-1927	広島高師			①②③
38	梁修仁	直隸	植物	本	1925		1925-1928	広島高師	官 1927-1928		①②③
39	華(萃) 汝成	江蘇	植物	本	1925		1925-1928	東京高師			①②③
40	李延禧 (禱)	湖北	地歎	本	1925	1928. 6	1925-1928	東京高師	官 1927-1928		①②③

41	廖(寥) 作霖	湖北	地鉱	本	1925	1928. 3	1925-1927	東京高師	官 1927-1928		①②③
42	余 愚	安徽	地鉱	本	1925		1925-1928	東京高師	官 1927-1928		①②③
43	程 勉	安徽	地鉱	本	1925		1925-1928	東京高師	官 1927-1928		①②③
44	黃恭憲	湖北		選	1926		1926-1929	東京高師 別科	補 27-29	③数学	①③

経（法科大学から分離→1919年経済学部に）79人

1(法 27)	杜國庠	廣東	政經→ 経	本	1916	1919. 8	1916-1918	一高	官 1918-1919	法科大から	①②⑥
2(法 28)	鄧紹先 (光)	雲南	政經→ 経	本	1916	1919. 7	1916-1918	七高		法科大から	①②
3(法 31)	何品佳	廣東	政經→ 経	本	1917	1920. 7	1917-1919	七高	官 1918-1920	法科大から	①②⑥
4(法 34)	何崧齡	福建	政經→ 経	選	1917		1917-1919	三高中退		法科大から	①⑦
			外		1920		1920. 01			1920 年度データ欠	①②⑥
5(法 36)	李希賢	湖南		本	1918	1921. 3	1918-1920	六高	官 1918-1920	法科大から	①②⑥
			院			経済学史	1921	京大経	官 1921		
6(法 37)	黃興元	廣東		本	1918	1921. 3	1918-1920	一高	官 1918-1920	法科大から、②黃興元	①②⑥
			院			1921			官 1921		⑥
7(法 38)	朱公準	廣東		本	1918	1921. 3	1918-1920	三高	官 1918-1920	法科大から	①②⑥
			院			1921			官 1921		⑥
8(法 39)	戎春田	直隸		本	1918		1918-1921	二高	官 1918, 1920-1921	法科大から	①②⑥
9(法 42)	張繕 (階)	直隸	政經→ 経	選	1918		1918-1919			法科大から	①⑥
			外			1920. 01				1920 年度データ欠	①
10 (法 43)	李國權	廣東	政經→ 経	選	1918		1918-1919			法科大から	①⑥
			外			1920. 01				1920 年度データ欠	①
11 (法 44)	于(干) 樹德	直隸	政經→ 経	選	1918		1918-1919			法科大から	①⑥
			外			1920. 1				1920 年度データ欠	①
12 (法 45)	安體誠 (德)	直隸	政經→ 経	選	1918		1918-1919			法科大から	①⑥
			外			1920. 01				1920 年度データ欠	①
13	金李洙		選			1919				1920 年度データ欠	①
14	路毓祉	河北	本	1919	1922. 3	1919-1921	四高	官 1921			①②⑥
15	陳 達	湖北	本	1919	1922. 3	1919-1921	六高	官 1920-1921			①②⑥
16	阮 湘	湖南	本	1919	1922. 3	1919-1921	一高	官 1920-1921			①②⑥
17 (法 76)	金正驥 (愚)	湖南	本	1919	1925. 3	1919-1924	四高	官 1920-1921	卒業後法学部へ		①②⑥
18	孫 極	安徽		選	1919		1919-1920			① 1920 年度データ欠	①②⑥
			本		1922. 3	1921					①
19	張家驥	江西	外	1919	1922	1919-1921					①②⑥

20	王薪 (新)民	奉天		外	1919		1919-1921		官 1920-1921		①⑥
21	何維湘	江蘇		外	1919		1919-1919				①⑥
22	黎世衡	安徽		外	1919	1922	1919-1921			⑥黎世衡	①②⑥
23	熊懷若	廣東		外	1919		1919-1922				①⑥
24	王元徵			外	1919		1919-1922				①
25	陳乃賡	浙江	本	1920	1923. 3	1920-1922	四高				①②⑥
			院	1923	工業經濟	1923-1924					①
26	熊 恢	江西	本	1920	1923. 3	1920-1922	七高				①②⑥
			院	1923	財政學	1923-1924					①
27	徐鴻漸	吉林	本	1920	1923. 3	1920-1922					①⑥
28	鐘自薰	江西	本	1920	1923. 3	1920-1922	三高				①②⑥
29	史維煥	貴州	本	1920	1924. 3	1920-1923	六高				①②
			院	1924	中華民國ノ 財政並ニ貨 制問題	1924					①
30	杜國興	廣東	本	1921	1924. 3	1921-1923	三高	官 1921			①②⑥
31	李超桓	廣東	本	1921	1925. 3	1921-1924	一高	官 1921			①②⑥
			院	1925	國際經濟論	1925-1926					①
32	王守椿	江蘇	本	1921	1925. 3	1921-1924	四高	官 1921			①②⑥
			院	1925	經濟原論	1925-1926					①
33	孫德脩	江蘇	本	1921	1923. 3	1921-1922			②孫德修		①②
			院	1923	農業經濟	1923-1926					①
34	漆樹芬	四川	本	1921	1924. 3	1921-1923	四高		②漆樹棻		①②
35(理 28)	竺華雲	浙江	選	1921	1924	1921-1923	東京高師		1924 年理學部へ		①②
36	黃御世	湖北	選	1921		1921		官 1921			①⑥
37	黃炳蔚		選	1921		1921-1922					①
38	龔樹森 (林)	湖北	選	1921		1921		官 1921			①⑥
			本		1924. 3	1922-1923					①②
			院	1924	經濟政策特 ニ商業政策	1924-1927			③「理學部」と誤記		①②③
39	陳愁烈		本	1922		1922					①
40	劉光華	湖南	本	1922	1925. 3	1922-1924	五高				①②
41	郭必 (心)崧	浙江	本	1922	1925. 3	1922-1924	五高				①②
42	戴時熙	雲南	本	1922	1925. 3	1922-1924	七高				①②
43(工 37)	江 鐵		本	1922		1922	八高		工學部卒業後經濟學 部に		①②
44	袁學海	湖南	本	1922	1925. 3	1922-1924	二高				①②
45	周佛海	湖南	本	1922	1926. 3	1922-1925	七高				①②
46	陳文瀾	湖北	選	1922		1922-1925					①
			本		1927. 3	1926					①②
47	李正陽		本	1923	1926. 3	1923-1925					①
48	王大鈞 (鈞)	湖北	本	1923		1924-1928	三高	官 1927-1928			①③
49	資耀華	湖南	本	1923	1926. 3	1923-1925	三高				①②

50	張源祥	安徽		本	1923	1924. 3	1923	一高		東京帝大経済学部から	①②
			院	1924	経済学史	1924-1926			その後文学部へ		①
51	曾廣駒	廣東		本	1923	1927. 3	1923-1926	四高			①②
52	龔修齊	江西		外	1923	1926	1923-1926				①②
53	張義明	廣東		本	1924	1927. 3	1924-1926	三高			①②
54	張 武	廣東		本	1924	1927. 3	1924-1926	七高			①②
55	李捷才	江西		本	1924	1927. 3	1924-1926	六高			①②
56	廖體仁	湖北		本	1924	1929. 3	1924-1928	八高	補 1927		①②③
57	荊(莉)嗣仁	湖南		本	1924	1927. 3	1924-1926	六高			①②
58	吳家齊	四川		本	1924		1924-1929	二高	官 1927-1928		①③
59	徐鴻馭			本	1924	1927. 3	1924-1926				①
60	鄧世隆	湖南		本	1925	1928. 3	1925-1927	一高			①②③
61	湯瀛(瀛)甲	湖南		本	1925	1928. 3	1925-1927	大阪高校	補 1927		①②③
62	林平祥			本	1925		1925-1926				①
63	李 捶	廣東		本	1925	1928. 3	1925-1927	五高	官 1927		①②③
64	林鏡秋			本	1925		1925				①
65	李克明	湖南		本	1925	1928. 3	1925-1927	八高	補 1927		①②③
66	黃厚端	湖南		本	1925	1928. 3	1925-1927	五高	官 1927		①②③
67	汪遵先	湖北		本	1925	1928. 3	1925-1927	五高	官 1927		①②③
68	羅繽(濱)	山西		本	1925	1929. 3	1925-1928	七高	官 1927-1928		①②③
69	于清淪	奉天		本	1925	1929. 3	1925-1928	山形高校	補 1927-1928		①②③
70	傅少華(萃)	貴州		本	1925	1929. 3	1925-1928	一高	補 1927-1928		①②③
71	周敬瑜	浙江		本	1925	1929. 3	1925-1928	六高	官 1927-1928		①②③
72	董道寧	浙江	外	1925		1925-1926					①
			本		1929. 3	1927-1928	八高	補 1927-1928			①②③
73	鄧 霽		外	1926		1926					①
		湖南	本			1927-1929	二高	補 1927-1928, 官 1929			①③
	鄧伯粹(粹)				1930. 3						①②
74	杜肅(蕭)		外	1926		1926					①
		廣西	本		1930. 3	1927-1929	五高	補 1927-1928, 官 1929			①②③
75	劉懋鏞		外	1926		1926					①
		奉天	本			1927-1929	八高	補 1927-1928			①③
76	龍守成		外	1926		1926					①
		四川	本		1929. 3	1927-1928	五高	補 1927-1928			①②③
77	高翔鵠		外	1926		1926					①
		奉天	本		1929. 3	1927-1928	六高				①③
78	龔 一		外	1926		1926					①
		湖南	本		1929. 3	1927-1928	七高	官 1927-1928			①②③

79	章 嚴			外	1926		1926				① ①②③
		陝西	本			1927~1928	三高	官 1928			
農学部（1923年設置）4人											
1	姜景曾	湖北	農學	本	1926	1929. 3	1926~1928	三高			①②③ ①③
			院			農業經濟	1930~1933			③昭 6. 3 帰国	
2	謙克終	湖南	農學	本	1926	1929. 3	1926~1928	七高			①②③
3	黃本立	浙江	農林化	本	1926	1931. 3	1926~1930	六高	補 1930		①②③
4(理 31)	曾鼓晨	奉天	農林經	本	1926		1926	佐賀高校		理学部にも在籍	①

注：下線付きは『人名調』による記録であり、二重下線は筆者の推定（選科生の規定及び出典の資料などに基づく）である。

出典：①『京都帝国大学一覧』各年版：（「学生及生徒姓名」、「卒業生姓名」）

②興亜院『日本留学中華民国人名調』1940年：（「京都帝国大学」、「第一高等学校」～「第八高等学校」、「東京高等師範学校」、「広島高等師範学校」、「松山高等学校」）

③日華学会編『名簿』各年版：（「京都帝国大学」）

④「狩野亨吉文書 清国留学生関係文書」東京大学駒場図書館所蔵：（「留学生の名簿」「清国京師大学堂派定留学生ニ關スル書類」付「清国京師大学堂留学生ニ關スル第一年報告書 下書」）

⑤清国游学生監督處『官報』（全12冊），国家図書館出版社，2009年：（「京都帝国大学学生表」光緒33（1907）年5月，第6期，532~533頁；「京都帝国大学在学各生最近調査表」宣統元（1909）年閏2月，第28期，22~23頁）

⑥中華民国留日学生監督處『中国留日学生監督處文献』早稲田大学図書館所蔵：（17「第一次留学生調査報告書」第1冊，大正3年7月~9月調査；24「帝国大学在学生名冊」民国7年7月調査；25「本所（監督處）管理之各省官費生名冊」民国7年8月；26「（民国）7年度秋季各經理處報告官費生一覽」；28「留日官費生總冊」民国8年4月調査；32「民国8年各帝大在学生冊」中華民国8年10~11月；34「民国8年春季各官費生名冊」；36「8年11月本處直轄官費生冊」民国8年11月；39「9年度留日官費生總冊」4月調査；45「10年4月官費生調査表」）

⑦嚴平「官立高等教育機関における留学生教育の成立と展開——第三高等学校を事例として——」『京都大学大学文書館研究紀要』第7号，2009年（「表2：第三高等学校留学生一覧表（1903~1908）」，「表4：第三高等学校留学生一覧表（1909~1923）」，「表5：第三高等学校留学生一覧表（1924~）」）

付録：「明治大正期（1903-1926年）京都帝国大学各分科大学・学部の中国人留学生統計表」 単位：人

学部人数	類別	1903	1904	1905	1906	1907	1908	1909	1910	1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	計
法 87	外国学生		2	4	2							4	4		2	1		3	6							11
	選科生										1	1			1	3	3	5	4	3	4					20
	本科生																									55
	不明																			1						1
	合計										3	0	1	4	5		2	2	3	6	11	4	3	5		87
医 19	外国学生										2					1	1				1					11
	選科生																									1
	本科生																									2
	専修科生																									3
	研究																									2
	介補																									1
	雇員																									1
	不明																									1
	合計																									1
工 74	外国学生										2	3	1													2
	選科生																									7
	本科生																									8
	合計																									19
	大学院進学																									1
文 23	外国学生																									5
	選科生																									1
	本科生																									5
	合計																									15
	大学院進学																									23
理 44	外国学生																									3
	選科生																									3
	本科生																									3
	不明																									3
	合計																									44
	大学院進学																									5
経済 79	外国学生																									8
	選科生																									12
	本科生																									52
	合計																									11
	大学院進学																									7
農 4	外国学生																									4
	選科生																									4
	合計																									1
	大学院進学																									1

注：各学部を合計した人数は330名（延べ人数）であり、実数は307名である。

京都帝国大学的中国留学生 ——以明治大正期（1903-1926年）入学者为主要分析对象——

周 一川

摘要：

京都帝国大学最早的留学生是1903年入学的馬和（君武）。1903-1926年期间有超过300名（各学部总人数330名，实际人数307名）的中国人留学生就读于京都帝国大学。

始于明治时期的“外国学生”制度是京都帝国大学特色制度，其内含根据时期的不同发生了变化。明治时期的“外国学生”是以国籍区分，含义是外国的学生。1920年前后，出现了留学生本科生（大都是一高～八高的毕业生）和“外国学生”并存的状况，已无法以国籍来界定“外国学生”，此时期是“外国学生”定义的转换期。进入昭和时期以后，“外国学生”的内涵逐渐清晰起来，是指旧制高等学校（一高～八高）以外的教育机构（包括中国教育机构）出身的留学生，有别于留学生本科生。

中日两国间“五校特约”协定（1908-1922年）的实施，培养出了一批“五校特约生”，他们中的一部分进入帝国大学就读，其持续时间超过15年。从本文的数据可知，这些留学生引发了中国人帝大留学的第一次高潮（第二次高潮发生在30年代中期）。

帝大生人数不多，但是他们回国后大都成为各个领域的中坚力量，为中国近代化的发展做出了重要的贡献。